明治二十九年

# 女學雜誌

四月刊行

# 第四百二十一號目次



# 明治女學校新築費募集廣告

謹んで吾國同胞兄姉諸君に訴ふ。弊校十年の志望を守り、倍々女學に盡瘁せんことを期念し、速に新校舎の與へられんことを祈る。冀くは、有志同情の諸君。之に對して義捐せられんことを。

明治廿九年二月

東京麹町區下六番町六番地

私立 **明治女學校**

右取次……女學雜誌社……

# 特別廣告

岡山孤兒院より「金八圓拾貳錢六厘」を寄附せらる。是れ實に汗血斷食の餘滴たり。之を受けて感激不能禁、特に之を別途の積立とし本校基本金の基礎となす。冀くは、四方有志の諸君、亦た別途の義捐を寄せて、此が上に積加せられんことを。

# 明治女學校新築費義捐慈善市廣告

明治女學校はさきに類焼の厄に罹られ、十年の苦辛一朝にして灰塵となりたるを歎かはしき限りなり。我等同情の心止み難き折節、此度び再築の爲め寄附金を募集せらるゝに付きては、爰に一の慈善市を開き、廣く自製の品を賣りて其收益を義捐せんと欲す。因りて此發起に賛同せらるゝ諸君は、何卒左の定に準じて應分の御助力あらん事を祈る。又開市の場所及日時は追而廣告すべく、入場切符は遠からず製作して廣く配布すべし。

一 六月中旬東京に於て二日間慈善市を開く事、

二 慈善市にて賣捌くべき品物を寄附せらるゝ方々は六月十日迄に發起人宅又は明治女學校へ向け送附あり度事

但し御送附の品には賣捌直段を一々記し置れ度事

以上

明治廿九年四月

發起人

小鹿島筆子
加藤さし子
横井たま子
津田梅子
瓜生志げ子
矢島楫子
雛賀あさ子
木村香芽子

賛成人

侯爵大山巖夫人
伯爵大隈重信夫人
子爵川上操六夫人
原六郎夫人さみ子

女學雜誌

明治二十九年
四月二十五日發兌

第四百貳拾壹號

## 社說

# 高等女子教育

高等なる女子教育の可否如何と云ふことは、文明國に於いてすら屢ば議論ありし所なり。左れど、如何なる邦國にありても、教育なるものゝ効能を疑ふものはあるまじく、隨つて其の必要を無みするものもあるまじ。扨て、既に教育の事を可なりとせば、其の教育の成るべく高等ならんとを冀ふは、人の情義の當然なる要求なり。女子教育に於て特り此の事理に背違すべき謂れあらんや。

左れば、高等女子教育の可否なる問題は、道理上、高等教育の可否を論ずるをもて要とせず、實際上、如何の程度迄での高等教育を當世に相當なりとする乎を論ずるを要とする也。實に此の講究は、至當のことにて、其の女子教育たると男子教育たるとを問はず、常に考查せざる可らざるの問題なり。何となれば、何如の滋養食にても、之れを用うるの時と量とは心を潜めて吟味すべきと同樣の譯にて、當世の特別の需要、一般の開發、受教者が能力の耐ふべき度合などを考へて、以て其の高等教育の程度を定む可きとは無論當然の道理なれば也。故に、女子高等教育の可否を論ずるの要義は他なし、方今何如んの程度の女子教育や好く相應するを論議するの主旨に過ぎざる耳。

然るに、世人往々、下の如き理由を陳じて女子の高等教育を否むものあり。其言に曰く。女子は家庭を治めて內助の役を盡すべきものなれば、之に高等の教育を與ふるとは無用なりと。此の意味もなき理由は特の外贊成せられ、世にあつて存外の勢力を有するに付き、玆に一言駁倒せざる可らず。夫れ家庭を治め內助に盡すとは、何等の義ぞ。惟ふに、世人、何時にても、何如なる格式にても、主婦はたゞ少しく下婢に優りたる丈けの事を爲せば足りなんと主張せらるゝにもあらじ。

たとひ賤しきと下婢の如きすら、中家の下婢と、高家の下婢とは、其務め同じからず、之に所望せらるゝ智識とたしなみとに於て大層の差別あるとを覺らば、况してや一家の主婦たるものが其の家庭を治め內助の役を盡さんに於ては、其の家の格式、其良人の地位如何によつて、執るべき仕事に繁閑複易の相違あらんとは勿論なりと知了すべし。然らば、高等なる敎育を受けて、高等なる智識を有し、亦た高等なる事業に從事して、高等なる理想を懷抱する良人に伴侶し、其家庭の空氣を高尙にし、其內助の趣味を高潔にし、以てよく良人最高の希望に適應せんものは、但だ夫れ高等なる敎育を受けたる婦女子のみにあらずや。室內よく治まり、坐臥、心に適し、出入飮食のもてなし不自由なき迄に好遇せらるゝとも、良人たるもの以て最上の滿足を感じがたし。吾が全躰を露はして能く知られ、吾が衷心を示して深く同情せられ、與に一心二躰の同伴を得んと、即はち高等なる情操を有する良人の熱望にあらずや。惟ふに、能く此の熱望に應へんもの、敎育淺き婦女子の能くする所ろならんや。知るべし、齊家內助の事業にありても、其の高等なるものを盡さんが爲めには、亦た高等なる敎育を要するとを。故に、婦女子の德家庭を治め內助に盡すにありとの理由を以て、其高等敎育を無用なりとするは、殆んど意義なきの論辯と言ふべし。

二

幸にして、今の士人、此の無意義の俗論に迷ふと多からず。道理上、女子の高等敎育なるものに反對すると尠なきと見え、去年來、各所に高等女學校の設立續々として起り、亦之に新入學するものも次第に增加するの景況也。抑そも、今の高等女學校は、今の女學の程度に合せて、眞とによく高等たるの實を有するや否やと言ふとに付きては、多少の疑問なきにあらず。左れど、此の實際の疑問は暫らく擱き、既に名づけて高等女學校と言ふ、其の當路者が之を目して親から高等の女學と自任するや明けし。然らば、則はち、此等の當路者は、道理上に於て、高等の女學なるもの丶必要を許して現に自から其の敎育に從事しつゝあるに非ずや。吾人故に曰く、今や幸にして、高等女子敎育を否むものは多からず、近時反つて其の贊成者を增すと太はだ多しと。

既に道理上に於て、女子高等敎育を否まずと見るのみか、實際に於ても現に一種の所謂高等敎育を施しつゝありと見ゆる

以上は、吾人今にして女子高等教育の効能を道理上より論議するの必要を見ず。但だ茲に講究すべきは、今の高等女學校なるものは、果して能く今の高等女學生の需要に應ずることを得るや否やと言ふの一事にあり。

今の高等女學校の科程は、尋常小學卒業後六年を以て最高度となす、即はち高等小學修業の年限後、僅々二ヶ年の勉學をもて今の所云ゆる高等女學の卒業とはなす也。名に於て高等たり實に於て極めて低度たる此の女學科程が、今の高等なる女學生の需要に應ずるに足らざることは、言はずして既でに明白なり。

近時七八年、所々の私立女學校に於て修業せし女學生は、尠くとも高等小學卒業後、四五年の科程を卒へ、更に二三年の獨學を了へたり。而して尙ほ大に學ばんとするの精神あるもの尠しとせず。亦た、一と度び助教々授の任にあたり、更に今ま高等の修業、もしくは一科の專門に入らんとに熱心せる女學士も少數にはあらず。然るに此等の需めに應じて高等なる女學の門戸を開くもの何處にもなし。抑そも誰か此の門戸を無用なりと言ふ。女子非凡の熱心をかけ、鋭意して眞理の研究に從はんと云ふとき、何ものありてか、其の希望を目して無益なりと言ふ乎。智力の猛進は、人生の精進なり、人間、勇を鼓し難を犯して眞理の關門に入らんと力むるとき、之を笑はんとするは無情漢なり。吾人は信ず、義勇あり、俠骨あり、熱血あるの有情者は、心を傾むけて今の高等女學生の希望に援助すべき筈なりと。

況んや是れ女子教育未だ一般に普及せざるの時に於てをや。人往々にして曰く、今の女子教育甚はだ幼稚なり、故に未だ最高等の女子教育を必要せずと。これ甚はだしき謬論なり。抑そも女子教育普及せず、故に率先身を挺して之が進張に力を盡すべき女學士を要することの更に切迫するに非ずや。惟ふに、高等なる女學士の先驅を要すること（よし多數にはあらずとも）、今の時の如く必要なることはあらじ。何んとなれば、今は即はち豫言の時、先導の時、奬勵の時なれば也。

此を以て吾人は切に最高等なる女子教育場の設立せられんとを甚たく望む。天下の士人既に高等女學校の設立に同意せり、故に吾人は高等女學なるもの丶必要を道理上に於て論辯するの用なしと言はん。但だ特に厲告して其の注意を引かんと

するものは、此等高等女學校の程度は、未だ眞に今日多數の高等女學生の需要に應ずるに足らざるが故に（此れ事實也）、茲に更に高等なる女學校の設けられて、方今の女界維新に率先々導すべき有力なる女學士の輩出するに至らんことを熱望すと。是れひとり吾人の熱望にはあらず、實に多數の高等女學生の熱望也、即はち方今の日本女學界の熱望也。嗚呼かの鋭意、學にもとめて其便を得ず、彷徨して空しく時日を消費する有爲なる女學生の苦辛を知れるものは、誰か感激して其の需要に應ぜんことを力めざらんや。

## ミノトー退治

青柳有美作詞
ボートスパイセ作曲

住居をクリートの迷宮に構へ。まよひ入る人の血しほに飽き、不仁さささらぬ怪物なれば。うちはたさましさ競ひすゝむ、セスヤスの前途あなあやうしや。握る縷糸はよしほそくとも。ひくや淑女の愛の力。かよわきうでよりうでにつたへ。みがきし矛さきいよゝつよし。アリヤドネの情あなありがたや。忽ちきこゆる歡喜の叫び。ミノトーの頭今ぞくだかる。民はうれしさに杯をあげ。天の萬軍また共にたちて。頌榮の聲高く萬歳萬歳。

# 女學

## 現今の婦人問題

事實は女學界の好時運なることを證す。其道に在るもの丶議論は素よりあるべきの事なれど、普通新聞雑誌によりて、婦人問題の論つらはる丶ことの、近來殊に多きを加へたるは、社會が此種の問題に注意し來りたるが故によるにあらずんばあらず。而して彼等は如何なる論據と如何なる觀察とを以て、この婦人問題を説論しつ丶あるか、吾人は以下讀者と共に之を知らんとす。

## ○文相が女子教育論

西園寺文部大臣は去三月女子高等師範學校卒業式に臨みて一場の祝辭を述へたるが中にいへることあり、

諺に一國の文明は女子の品位如何に於て之を卜すと。蓋し女子の社會に於ける、家庭の教育より、郷黨の風俗に及び、牽て一國の汚隆に至る、皆是れ女子の學問に根底せざるを得す、今や帝國の進歩は、駸々として世界を傾聽せり、然るに獨り女子教育の點に於ては、未た此隆運に向ふ能はざるものあるに似たるは、本大臣が深く憂ふる所なり

と。これ同文相が昨年五月に各高等學校長及び尋常師範學校長を集めたる節、女子教育の意見を述べたるものに等しく、益々以つて文相の大いに憂ひをこれが上に存せるを確かむるに足る。

## ○教育時論が『戰後の女子教育』

是れ素より教育專門の雜誌なり、然れども女子教育に就ては平素餘り多くを之より聞くこと能はず。然るに其第三百九十六號（四月十五日發刊）時事偶感中に、『戰後の女子教育』てふ一篇あり。素より短文なりと雖も、論其要緊を得たり、中に曰く、

> 抑本邦の女子教育たる、概ね極端の主義に傾き、或は直に歐米の女子教育を摸擬せんとし、或は漫に本邦古風の型式を株守し、或は中等以上の社會の兒女にして、下等社會の學ばざる可からざる職業をば、却て娛樂の一端として之を學び、或は下等社會の兒女にして、淸元、常磐津などの師匠の下に卑猥なる唱歌を學ぶの外、殆ど教育なく、共に本邦女子の教育として、正鵠を得たるものと謂ふ可からず。
>
> 嗚呼本邦女子の爲に教育の大業を講じ、能く本邦の國風を、現在及び將來に於ける國家の境遇とに適應せしむるものは誰ぞ。啻に男子の爲めにのみ、戰後の教育を策らす、女子の爲めにも、嘗て亦之が教育を策らんとも、是れ我國教育家の責任と知らずや

と。吾人は如斯くに痛論切議する其『教育時論』たるものが、自ら奮て、今後盛んに本邦女子教育の爲めに說き、之に忠實熱心ならんことを希ふ。

此頃の教育を論ずるもの、大方二口目には女子教育の振作せざるを慷慨するの聲あり。之を例せば『國家教育』第四十九號の懸堂生が、政府が教育高等會議を開設せんとする議會の建議を排斥したるを憤慨して痛論せる中にも、今日の如き學政の方針にては高等女學校及び女子の就學は幾十年の後に普及すべきやといへるあり。また久保田讓氏が『明治二十九年度歲計豫算に對する學政上の意見』を述ぶるが中に、國民の良妻賢母を養成する高等女學校は數年來一校を增さずと慨し、また氏が將來學政施設の緊急要項中にも高等女學校を增設し女子教育を奬勵すべしとの一條あり。廿二年以降には女子教育を論ずるもの多くは之を消極的の方面よりせしに、既に今日に至りては、いづれも積極的となりたるを見ても、亦以て女子教育が漸々進步勃興しつゝあるとを卜するに足らんか。

## ○工女教育

工業製造業の發達は、大に工女の需用を增加して、爲めに下女の拂底を告げ、結果賃金の騰貴を致すに至れり。而して工女なるもの、日に多きを加ふると共に、工女敎育の事いよいよ憂ふべきものとなれり。工女の輩は元來下等社會無敎育者の中より出づ。而して、無智蒙昧の徒を、多數一處に集めて、日夜工塲に出入せしむるに於て、卑猥淫靡の風を增長せしむるは必然の理にして、吾人未だ深く之を察せずと雖も、聞くが如くんば、養蠶時地方に於ける工女の淫風頗る甚しきものありと。今日漸々增設せらるゝ幾多の紡績會社に於て、多數の工女を使役するに當り、彼等が間の風習は如何、心あるもの、尤も憂患痛嘆すべき事には非ざるなきか。工女を使役するとは、一方には事業の上に低廉の賃金を以て、使役するに易き勞働者を得るの便あり、他方には下等社會の婦女子の爲に職業を授け、生活を容易ならしむるの利ありと雖、彼等工女なる者の多くは、年若くして、情慾發達の盛りに在るとなれば、淫風は彼等の尤も陷り易き弊害にして、而して工塲の



出入は、これに墮落するに尤も便利なる機會を與ふるものならん。さらば社會改良の上よりして、工女の取締を嚴重にし、而して其敎育を怠らざるは、今日の急務にして、將來ます〳〵發達せんとする工女使用の途に良法策を授けざるべからず。社會改良家及び敎育家たるもの、之が爲めに精思熟考する所なかるべからず。而して又彼等を使用する工塲主をして、必ずや工女敎育の法を立つるの責任を有せしむるに至らざるべからざる也。然るにかくの如く重要なる工女敎育の事をいふものは、近來實に稀れにして、僅に之を『太陽』第七號敎育欄內雜論に於て聞く。要するに、下等社會の女子は、賃錢收益の多寡によりて、下女たらんよりは、工女たらんとし、其中淫靡の流は、半妾的下女たらんとを欲す。今日女工の發達と共に、工女敎育の必要を唱へ、着々之を行ふべきは、注意ある敎育家の任なりといふなり。

工女敎育の事、もし之を輕々視せば、大なる誤りに陷らん。工女たるものは即ち、將來に於て現在に於て下等社會人民の母たるべきものに非ずや。されば社會改良に於て尤も難事なる下等社會の人民の改良には、先づ工女を捉へて、之が目

を開き、是が心を敎へんと、最良最易の策たるに非ずや。されど此工女敎育、素より容易の業に非ず、工場主の慈善心なかるべからず、之が敎育者たるものの熱誠なかるべからず、之を得んと極めて難し。さればとて一日之を忽にすべきに非す、故に吾人は工場主の上に一責任を加へて、政府が工女使用規則なるものを制定して、其中に工女の爲めに敎育を授くるの要件を設けんことを切望するなり。

工女敎育の必要は逼まれり、而して下女敎育、子守敎育の如きも、亦看過すべからざるの問題なり。敎育家たるもの此等問題の爲に動き出さゞるべからず。たゞに普通敎育を盛んにし、高等敎育を興すヿのみを以て社會を改良進歩せしむる敎育の道を全うするものならんや。

記者此項を記し了りたる後、『報知新聞』の報ずる處によりて、鐘ヶ淵紡績會社に於ける、工女敎育の方法に就き聞くヿを得たれば、左に其梗概を擧げん。

鐘ヶ淵紡績會社にては、其食堂を利用して敎場となし、夜業をなすものには、朝の八時より同十時迄の間に於て、晝業をなすものには、夜の七時より同十時までの間に於て學を受るの便を備ふ。學課の程度は、讀書、算術、作文、習字、英語、裁縫等あり、學期は四年にて、毎年三回の試驗を行ひ、最後の試驗を昇級試驗となし、優等者には優等賞、其他の及第者には奬勵の爲めに賞與あり。敎師は女子高等師範學校の卒業生一名にて餘は四年生中のもの助敎をなし居れり。また他に裁縫の敎師あり。會社にては十六才未滿の工女は成べく就學せしむる方針を取り居るよしなれども、就學生徒として登錄せらるゝものは僅に二三百名のみにして、而も日々の出席はなほ更に七十名內外の少數なりといふ。

東京紡績會社にても略同樣の敎育法を備ふ。吾人はかゝる敎育法の凡て工女を使役する諸種の會社に備はらんヿを望む。然れども鐘ヶ淵紡績會社に於けるが如く、一二千名中の七八十名のみ、この敎育の恩化を受くるヿを以て滿足すべけんや。工女の敎育や、工場主たるものが、其業に注意するヿ同樣に注意すべく、工女の勞働に酬ゆるは、たゞに日々幾許の賃錢を以てするヿにして足れりと見るべからず。彼等を敎育するヿを以て、また彼等に對する報酬の一半と信ずるに至らずんばあらず。かくて工女たるものもまた喜んでこの報酬

を受くるに至るの美風を奬勵せんとを望む。また望む工女の敎育が、智育に偏せずして、其德育に重きを置かんことを。智育もとより彼等に必要なり。然れども讀書習字等が豈に工女の地位を高擧するものならんや。之を社會改良の點より觀、之を工女が將來より察すれば、德の敎育や、彼等が爲めに尤も必要なるものたり。今後の工女敎育者たるもの頗る爰に考究する所あらざるべからず。更に工場主に向つて望むべきは、徒に其工塲組織の外見を飾らんが爲に、工女敎育の約束を置くが如き、事實の爲めの熱心と義心とを離れたるの所業なからんとなり。工女の敎育に關しては、吾人は本誌の記者として、なほ多くの言ふべきものを有す。されば、他日筆を改めて、更に大に之を論ぜん。

## ○萬朝報の『新選女大學』懸賞募集

『萬朝報』が四月十一日を以て其第一千號に滿ちたるを祝せんとするに當り、祝意の計畫は、彼新聞としては實に不思議と思はれべきの方面に出で『新選女大學』なるものを新に撰定せんが爲めに、賞を懸けて廣く原稿を募集す。該新聞が此擧を起さんとするの主旨としていふ所の要は、彼の『女大學』『女今川』は既に數十百年の間、全國の津々浦々に行はれ、家々に備へられ、日本女子の風敎に最大の効力を有して、風俗の純朴なりしも、人情の敦厚なりしも、皆一は是の賜にして、烈婦賢母貞女之によりて起りたりとて、古の『女大學』等を賛し、而して、



然るに維新の頃よりして世の形勢都て一變せしに連れ、女子の行ひも單に儒敎主義のみを以て律す可らざるに至り「女大學」の類は全く廢棄せられて、而も未だ「女大學」に代り女子終生の行ひに標準たらしむ可き德敎の道定まらず、女子の心も行ひも坐作進退も殆ど一定の標準とする所無く之を社會の手本たる可き中流以上に觀るも或者は西洋男女同權の如き敎に傾き或者は舊俗を守らんとして得ず新俗に化せんと欲して又得ず、中間に彷徨して適歸する所を知らず、女子德敎の弛頽せるこそ今日より甚だしきは莫し、更に中流以上を見習はんとする下流の女子に至りては見習ふ所を得ずして放恣、乖倫復た言ふに忍びざる者あり、女敎斯の如くにして如何にして烈婦を得、貞女を得、賢母を得ん、又如何にして淨淸の家庭を作り純朴の風と敦厚の情とを社會に養成する事を得ん、人々惰弱、逸樂に是れ耽けるは旣に今日の弊風なり、今日以後我國の家庭は恐らくは女子風俗の適歸する所を得ざるが爲めに有爲の兒を養成する能はず、天與の良材をも碌々の間に腐敗せしめ凡々碌々の徒として生長せしむるに止まらん、今にして之を救はずんば實に國家の將來を如何せん、

といひ、この時弊を救はんが爲めに、維新以前の女大學に代るべき女子の讀本を作り、之を第二の女大學として、全國の

津々浦々にまで頒布し、天下の女子をして、悉く之を誦せしめ、以て幾分か我國女子の心と行とを律することを得んことを望めり。

萬朝報は、如何なる標準を以てこの第二女大學の原稿を撰擇し、如何なる人の卓說か、其賞を受くべきやは、五月卅日の〆切期限以後猶幾日を出づるに非らざれば、之を知ることを得ず。而してまた假令該新聞が望み通りの『新選女大學』なるものが出來上りて、廣く之を天下の女子に頒つのとき、これ果して、昔益軒の『女大學』が及ぼしたる如き効力を有して以て女子の風敎を補ふに足るべきか否やに就きては猶疑ひなき能はずと雖も、かゝる讀本の世に出でんと、女學界の爲に賀すべきの事にして、而もまた萬朝報の如きが、他に卒先してこの擧をなすに至りたるを喜ぶや切なり。

## ○女子と傳道

組合敎會は去三月末日、其敎役者會を、宇治川の邊り、翠巒碧水の地に開き、傳道の成功てふ問題を以て懇談會を開くことありき。而してこの時傳道の成功に於ける、妻氏の功德を述ぶるもの二人、其一人を長田時行氏とす。氏曰く

第一に傳道に成功せんと欲せば、其妻の賢明ならんことを要す。折角に築き上げんとする夫の事業をも、其云爲の如何によりては、忽ち破壞せらるゝことあり。之れ妻たるものは賢明にして、能く內助の厚からんことを要する所以なり。

と、他は即ち宮川經輝氏なり。氏もまた曰く、

傳道には訓練を要す、訓練は之を己より始めて、第二は其妻を訓練せざるべからず、我身を訓練し、又其妻を訓練し、而して外に臨む、其傳道の成功する亦自然の道なりとす、

と。傳道者良妻を要することは、いつの世にありても、感ぜらるゝことなるが、此時運に際し、而も大方は妻の事をいふを嫌へる日本人の口よりして、懇談會席上に、以上二氏の如き談話を聞くは、何となく珍らかに思はる。二氏のいふが如きは、傳道者の內助者として、傳道の成功に於ける妻女が間接の功勞を稱するものなれど、之と趣きを異にして、近來婦人問題の稍世間に聞ゆるに至りたると共に、婦人傳道者の必要を論ずるの聲は、佛敎界に於ても聞ゆ。我社雜誌は一月に於て、盛んに對外女傳道士を起すべきを論じたるが、『佛敎』及び『東京慈善新報』の本多澄雲氏は、また『婦人と監獄』を論じ、監獄敎誨の方面よりして、婦人佛敎傳道者の輩出を促が

し、『太陽』記者の如きも、亦大に此必要を說けり。我邦の基督敎會は未だ吾儕の論ずるが如くに、對外女子傳道士の必要を感ぜざるにもせよ、普通女子傳道者なるものは、敎會と共に、常に存在して、有用の運動をなしつゝあり。然るに佛敎界及び神道界に至ては、尼衆巫女の徒ありと雖ども、彼等は正統の傳道上に、殆ど何等の効能もなく、天理蓮門の徒中の尤も有力なる傳道者は婦人なりときけども、彼等のあるによりて生ずる弊風には頗ぶる嫌惡すべきものありと傳ふ。兎に角、女傳道者の絶無なるを訴ふるが如くに見ゆるものは、佛敎界なり。されば近頃佛敎界中の有志によりて、屢女傳道者の起さゝるべからざるをきくとあるに至れり。佛敎界たるもの今日の如くにして果して眞の女傳道者を養成し得ること、よく基督敎會の如くなり得べきか、成否は未だ之を知らざるも、近來の佛敎界が、或は家庭を論じ、或は婦人を論ずるに至れるは、彼等もまた社會の形勢と共に、此種の問題に目を醒すに至りたるを知る、今後は更にまた佛敎徒よりして斬新奇拔なる婦人論を聞くと多からん。而も既に之を聞くとや、既に新佛敎の建設を以て自任する彼救世敎の機關雜誌「敎世の光」は其近刊に係る、第六十一號に『佛敎に於ける夫婦男女の道を論ず』あり。

> 女人を敬せずして、地獄の使さけすみ、若くは女人をのみ嚴にして、男子を寛大に放任したる儒流の弊風、或は僞佛敎の所說は、遂に女人を卑屈ならしめて、端なく男尊女卑の醜態を現じ、愛の宗敎を以て自ら誇れる耶蘇敎主義の人民は、白晝往來に、接吻の醜狀を演ずるに至る、男女夫婦の道は徹頭徹尾相敬相愛の觀音經主義によらざるべからず

と論じて、女人を賤しむるを以て僞佛敎と誹り、男尊女卑を醜態と罵り、彼が所謂新佛敎の基本とせる觀音經は、相愛相敬を以て男女夫婦の道となすといふとや、吾人をして轉往年の田中智學が佛敎夫婦論を回想せしむ。然れども、かれは法華經を以て、男女同權を說くものとしたりしに、此は亦觀音經を以て夫婦同等の道を講ずとなす。佛敎の敎理由來廣大無邊、故に福澤翁の大は矛盾を容るといへるが如くに、時には男尊女卑と現じ、また時には男女同權と現ずるものか。彼記者が論ずるが如くに、新佛敎なる救世敎は、女人を尊敬するが故によるか否やは知らねども、該敎が多くの女人信徒を有することは、該敎に於て注意すべきの一現象なりとす。該敎の報告によるに、先日來入敎したる信徒八人中、五人は女子

にして、三人が男子なると、また府下をはじめ、其傳道地到る處に救世婦人會の稱を以て成れる、女人講社の存在せるあり。また近來新に一二の婦人傳道者を獲たりときく。且つ同教の新趣構として、其教會にオルガンを使用するが如きもまた少しく注意すべきの現象なり。熟ら女子の性質を觀ずるに、元來保守主義に傾けりと雖も、其信仰に於ては、同種類の範圍内に有りと見ゆる限りは、割合に新を追ひてこれより彼に移り易きものなり。されば佛教より轉じて基督教にうつるとは、女子の難んずる處なれども、同じく神道の範圍内に在るが如きを以て、容易に天理蓮門の徒に轉ずることをなし、同じく佛教の範圍内にあるが如くにして其目先きを新にせるは、救世教が多くの女子の教徒を受くる所以に非らざるなきか。吾人は素より救世教を目して、天理蓮門の淫祠と同一視するものに非ずと雖も、其女子信徒は眞理によりて轉宗をなしたるものなりといふに憑信を置く能はず。女子が信仰上同一の範圍内に於けるの轉宗の、道理ある判斷を加ふるによると極めて稀れなるものを。



○迷執と女性教育

女性の迷信に於けるや極めて大なり、凡そ其貴賤を問はず、家庭の迷執は、女性たる母妻の專ら持する處にして、其因は女性が道理の教育の乏しきによらずんばあらず。彼天理蓮門等淫祠迷信の盛んなる、實に今日を以て其極と稱すべく、而して其信徒中に多くの女子を有し、彼等によりて、其家庭に此迷執を齎らし來る。社會改良の運動として、必ずや此種淫祠を撲滅せざる可らずと雖も、迷信は迷執なり、其執する處は道理的感情を以て之を破るべく、されば家庭の迷執を破了せんには、家庭を宰れる女性の上に道理の教育を得せしめざるべからざるは勿論の事なり。近時淫祠の害風日に盛んにして、是が撲滅を思ふもの多し。而して思ひを爰に存して、其最良方策は遂に女性教育の擴張を計るの外なしと論ずるものは、『反省雜誌』第一年第三號の姫宮楚門氏が「淫祠と女性教育」なり。氏は淫祠を毀つと雖も、迷信破れずんば、淫祠猶其實に於て存在せんといひつ。

迷信何に憑て來るか、余は斷じて之を教育の普及せざるに歸するものなり、換言せば女性教育の未だ全からざるに歸す。……吾國の信仰界を淸め、道義界

を滅はんが爲めに、迷信を杜滅せんには、是非共教育の普及を計らざるを得ず、而して特に女性教育の普及を希はざるを得ずと論ず。論の如くに信仰界を清め、迷信を排せんが爲めにせんとするも、或は如何なる觀察點よりせんも、女性教育の必要に感じて、其普及を希望するもの〻、益々世に多からんことを望む。女子教育にして、大なる進歩をなさば、社會の万事は必ずや驚くべき刷新をなさん。

因にいふ三月の早稻田文學は、家庭の迷執に就きて種々述ぶる處あり、太陽第八號また迷信と教育を論ぜり。

## ○女子の職業

四月九日以後の報知開新は目下女學上の有益なる一問題を捉へて、叮嚀綿密に『女子の職業』を觀察報道することに於て、吾人は感謝なき能はず。該新聞は

醫者、音樂師、小說家、學校教員、保姆、電話交換手、看護婦、按摩、紡績、織物、製紙、製紙、造幣、活版、編物、造花、ミシン縫、組箔、箱細工、養蠶、糸繰、裁縫、機織、産婆、女髮結、女桂庵

等二十餘類を列擧して、これ等を現今女子の職業中の主なるものとし、而して此等に就きて、一々觀察を遂げ、なほ都下に於ける製造所學校等の實況を洞査し、細大洩さず、之を網羅せんとすと告げ、既に報道する所、女醫、紡績工女の二種に亘れり。先づ其女醫に就きて調査せるもの〻梗槪を擧ぐれは、女醫の現況は、目下女醫のある地方は、重に東京、大阪、神戸、長崎等にて、川越、仙臺、若松、宇都宮等にも營業するものあり。維新以後我國最初の女醫は即ち、我女學雜誌にも關係少からざりし荻野ぎん子にして、同氏は當時北海道にあり。而して目下府下の有名なる女醫は、

日本橋　高橋みづ　京橋　吉田けん　赤阪　大村のぶ　同　岡見けい
本鄕　伴　はる　同　馬宮八重　同　鷲山彌生

等にして、其外東京病院には助手田島かん子あり、丸茂病院には、助手丸茂むね子あり。今は廢業し居れども本田銓子といへるは、かつて常宮殿下の侍醫たりしとあり。而して府下の女醫中尤も流行するは高橋みづ子なりとか。今日にては女醫として立派に開業せるもの、全國に三十餘名あり、其他に開業免狀を有して、未だ開業せざるもの、若くは看護婦となり居るもの、及び前期の免狀を有せるものも少からざるよし。また全國には三四名の齒科女醫あり。

高橋みづ子の如きは一日六七圓の收入あり、病院の助手は五圓乃至二十圓の月給を得るとか。また都下にて開業せる女醫の年齢は大凡三十歳以上なりといふ。

今日女生をして正則的に醫學を修めしむるものは、都下に唯一の濟生學舍あるのみ。同舍の女生は東京、新潟、長野、岐阜等より出づるもの多し。また佐藤氏の順天堂病院にても前期若しくは兩期の免狀を有せる女醫學生の、研究科に入學することを許して、其數は目下三四名ありといふ。而して近年醫術開業試驗度毎に、七八名乃至十二三名の女子受驗者ありしが、本年は前期後期及實地の女子受驗者は總計卅一名ありとか。我邦醫術開業試驗ありて以來、女子受驗者を有すると這回を以て最も多しとなす。

次ぎに紡績工女の現況を調査せるを見るに、現今紡績會社の數全國に五十ヶ所あり、其事業の尤も盛んなる地方は、大阪、岡山、愛知、東京、廣島、兵庫等にして、就中大阪府下の如きは會社數十三箇所の多きに及ぶ。又全國に於ける紡績會社の總錘數は六十万、之に使役する工女殆ど五万人。而して二千人以上の工女を使役するものは、大阪紡績、攝津紡績、三重紡績等の諸會社にて、一千人以上のものは鐘ヶ淵紡績、東京紡績、天滿紡績、浪華紡績、平野紡績等の諸會社なり。而して女子を紡績所に使役するは、鹿兒島藩主島津公が明治三年初めて泉州堺に一の紡績所を設立したるの時に起れりといふ。

府下に於て鐘ヶ淵紡績會社には其錘數四万あり、工女總數千七百廿九名、内工場に寄宿するもの一千三百名、通勤の者四百廿九名あり。東京紡績會社には二万六千錘ありて、工女の數は一千餘名、内寄宿者八百餘名あり。小名木川綿布會社は綿布製造の傍に、紡績を營めるまでにして、錘數も僅に五千、工女は綿布を織るに使役するものと共に五百餘名に過ぎずとぞ。

紡績工女の賃金は鐘ヶ淵紡績會社にては、新參の通勤者は日給五錢、寄宿者は日給八錢、而して一日の食料六錢なり。東京紡績會社は通勤寄宿の別なく、新入者には日に八錢を給せり。增給は會社夫々の定めありて、鐘ヶ淵紡績會社にては毎年三四回の增給を行ひ、一錢乃至二錢を增し、東京紡績會社にては、定期の增給なく、時々工女の成績を見て、賃錢を加ふる由。其外にまた勞働の成績によりて計算する賃取りの定規もあり。總て枠數卷數にて計算し得らるゝものは賃取り

の定めにて、粗紡は一ハンク大抵三錢内外にして、熟練者は七ハンクより七ハンクを揚ぐ。又揚枠の賃錢は一枠五厘乃至六厘にて熟練者はよく一日五十枠を揚ぐべし。然るに精紡は始終日給の定めにて、五錢より始まりて、十五六錢に終り、之れには多く幼年者を使役す。また各社ともに賞與の制ありて、鐘ヶ淵にては欠勤なき者には、一ヶ月には四十錢、三ヶ月には八十錢、六ヶ月には一圓二十錢を與ふ。また三ヶ年の全勤者には十五圓、五ヶ年には二十五圓、七ヶ年には三十五圓を與ふ。東京紡績に至りても、亦畧之に同じ。また時々一圓以上五圓以下の賞を懸けて、奬勵法を行ふとありといふ。故に工女は定賃金の外に増金賞與等あれば平均最下等にて一ヶ月三圓内外、中等にて五六圓、上等は十圓前後の收入あり、既に東京鐘ヶ淵の兩會社にて一ヶ月十圓近くの給料を得るもの二三十名ありといふ。

以上女醫及び紡績工女の二種は報知新聞が今日までに調査したる所のものなるが、なほ今後他の二十餘種に亘りて、同様精細の調査をなすとなるべければ、吾人は之によりて大に學ぶ所あらんや必せり。扨て女子の電話交換手の事につき、先日新聞の報道する所を見るに、東京、大阪にても既に數十名の婦人交換手あり、音聲の優美なると、事務の緻密なるとを以て頗る好成績を得たり。其後遞信省電報調査所にても婦人を使用し電報の原紙に就きて、字數、語數、料金の正過等を調査せしむるに、頗る適當なる成績を表はして、同調査所は、目下二名の監督官吏を除くの外は、悉く女子を用ゐ、現に三十餘名あり。而して女子は處理綿密にして、執務中、空談に時間を浪費せず、また出廳時限に後れず、加ふるに少額の俸給を以て採用し得らるゝよりして、遙に男子を使用するに優るの利益ありといふ。如此き職業に對する婦人の能力の漸次に承認せられて、女子職業の區域の擴張せんとは、社會の爲め、女子界の爲めに、甚だ祝すべきの事なりとす。



## 科學としての家政學

T.A.生

生理學あらず、解剖學稱道せられざるの前より、人は生れ、人は死し、躰内の諸機關亦たその官能を逞しうし居れる如

く、人は家政學の智識なくして尙ほよく家事を處理し來れるは蓋ふべからざるの事實なり。然りと雖どもカーライルのサルタス、レザルタスは『旣に衣服あり豈に衣服哲學なからんや』と衣服哲學をさへ畫策し出ださんとせりと聞けば、旣に家族あり、是が處理の一日も缺くべからざる上は家政學なるもの起りて、この家族てふ有機躰の機能及其作用を硏究せざるべからざるは當然の理なりと云つべし、殊に家政なるものは人間の幸福社會の狀態に影響を及ぼすと至大のものなれば其忽にすべからざる亦火を見るより明かならん。

今や米國にありては婦人にして高等學校の業を卒へ、社會にあるもの業に三千人を越ゆるに及びしが、彼等のうち專らこの家政問題に眼を注ぐもの續々出で來り、或は一種の學校樣のものを設立して家政に緊要なる事物の敎授を試むるに至りしも、其多くは徒弟制度を取り、たゞに書生をして事物の練習をなさしむるに止り、一科の純然たる科學として家政の操縱に貫通せる不變不動の原理法則を會得せしめざるより、比比皆失敗の跡を遺すに止まり居りしも、今や大にその誤れるものあるを知るに及び、シカゴ大學及ウイスコンシン大學の如きは、之を堂々たる一科の科學に組みたて、敎授するに鋭意し、殊に後者の如きは家政學分科なるものを同大學內に設け、總長アダムス氏の夫人主として之にあたり、昨廿八年の春期よりはかの有名なるイリー博士が方案に基き十二種の講義を開講し、三年の修業年限に於て家政學の原理を會得せしむるの方針を取るに及べり。今玆にその十二種の講義の細目を示し、世の斯學に志しある人の參考に供へん。

(第一)組織家政學 (Statics and Dinamics of Household Economy)

家政と人生との關係。家族の組織及機能、家族の要素及相互の關係。家政に必用なる藝術、才藝及科學。家政學に關する俗說、其原因結果。個人性と概括力。科學上よりせる小兒と野蠻人とに關する觀察。家政學の進步。男女分業法、共生物學上の理由。人類の產業的進步。

(第二)家屋論

家屋の定義。家屋と人命との關係。持續年限。家屋搆造法の進步。厨房室應接所及相互の關係。分室法と社會進步との關係。茅屋と堂宇との比較。茶營と木造家屋との比較。摸範的農家。產業の種類と家屋との關係。太古の店。天然家屋と人造家屋との關係。地質位置礎及高サ。地質圖。孤立生活法と團躰組織生活法。理想的市村。

(第三)家屋造搆論

建築法と家政學との關係。建築法と各種の藝術との關係。太古の建築法、其宗敎政治家族等の諸方面に於ける進步。國君と市府との關係。古代に於ける公用家屋及私用家屋の建築法。ヘラキユラニユウム及ポムペイ。東洋に於ける家族の性質。家屋の家人に及ぼす影響。家屋及家族。產業的建築法と家族的建築法との相違。各宗相互の位置晩近歐米の家屋建築法。住居の目的を以て

建築するものと實液の目的を以て建築せるもの。各家庭の業務。金線樋法。各家庭の要素。現今の趨勢。

（第四）家屋衛生論 (Organism of the House.)

家屋衛生と家屋造構の要件。家屋衛生法。風通及換氣法。光熱及水の供給。古代及近世に於ける地下穴居人種。家人の數と空氣との割合。空氣と婦人。空氣と男兒。夜風。公同換氣法及個人換氣法。米國の校舍。光線及其心身に及ぼす影響。日光浴法。人工發光法。人工發熱及自然發熱、其應用。排水管。良水及不良水。下水排泄法、其進歩及現今の方法並に趨勢。

（第五）粧飾論

天然界藝術界に於ける粧飾の用並價値、其法則原理、哲學との關係。其發達進歩の歴史。人種上特異の發達。人種の影響。變遷の時期。現今の狀態。男子の粧飾と女子の粧飾。家庭は如何にして美はしかるべき乎。婦人の美に關する觀念。婦人の工藝品。蠻俗の遺習。藝術に於ける眞理の教育及德義上の價値。藝術上の罪と道義上の責。家庭學校及牢獄。實行力。陋屋なほ宮殿たるを得。國民藝術的進歩の必用等。

（第六）器具論

器具と人生との有機的關係。人類の發達は有意的にして動物の發達は無意的なり。製作に關する法則。實用と美。實地に必用なる要件。動植鑛物の比較的價値。美の應用せらるべき範圍。家具の發達、座具類、卓子、棚、食器類。器物、道具、其歴史及現狀。階級産業の種類。富の程度男女の別年齢の多少との關係。小兒用器具。敷物類。家内粧飾品。器具の種類及其職分。變化は進歩の要素。理想等。

（第七）家業論 (Household Industries.)

組織及効用。社會機能の發達と家業との關係。家業の發達せる分業にまで進歩せる歴史作業と作業者との關係。分業の心身に及ぼす影響。分業論。産業に於る男女の別。人種の影響。現今に於ける家業の國家經濟及人性の發達に及ぼす影響等。

（第八）營養論

家族の營養と個人及社會との關係。機關内の營養。機關と組織。營養の生命に必用なること。生存競爭生存競爭、影を絶て發達その役を奪ふ。廚は家族の胃腑。太古の營養品。その進化。生理的必用。新陳代謝。年齢と職業。人種によれる差異。理論並に事實。米人の謬見。營養品の取捨と其効果等。

（第九）食品論並調理論

食品の化學的成分。動物質食品と植物質養品、鑛物質成分。肉食。營養上の價値。野菜論。普通及特異調理法。食事論。菜食論。調理せらるべき動物。調理は藝術なり。科學なり手工なり、職業なり。太古古代近世及各地に於ける調理法及其器具。乳兒少年青年老年及患者用食品。市場及市場に處する道。食物檢閲論。文明的生活法。

（第十）清潔論並清潔法

清潔は家事の樞要地を占む。家族機關の排泄組織。摩擦、酸化及老廢。必然的消耗。塞所と物置。燃材と蠅。人は塵埃を作る。器械的及化學的清潔法。太古家族には排泄組織なし。年二回の塵除。洒掃及塵はたき。風口。塵埃と其危險。黴菌其他顯微鏡的有害物。藥用清潔法。光線と物質的。心理的道義的清潔。清潔法を行ふべき物及其結果。

（第十一）勞役論 (Service.)

婢僕問題。現存婢僕取扱法の不可。勞役と勞働との區別。勞役は人類の特得。勞役の哲理。分業と共同。太古の勞役は壓制的なり。勞役法の進歩。勞役の品性に及ぼす影響。社會經濟と婢僕との關係。婢僕現今の位置。徒弟學校及其成果。冠婚葬祭。婢僕雇人藝術家及教師。

（第十二）生活論 (Organized Living.)

個人及種屬の組織に關する法則。人種國民政治家族等各種機關の進歩發達。太古家政の狀態。婦人の世界男子の世界。如何にせば男兒等をして家庭に長く止まらしむるを得る乎。太古の遺習遺俗。腦に及ぼせる影響。生存競爭時代の遺風。文明との關係。家庭の勢力。文明之基本。人間今日の生活。倶樂部、旅店、下宿屋。高尚なる教育と高尚なる生活等。

以上は是れウィスコンシン大學家政分科の教授綱目なりと雖

ども家政學科を以て一の分科たらしむるはこれ現今米國諸大學の方針たる者の如し。さればカリフオルニヤ州スタンフオード大學の如き又昨夏來之を設置し、コーネル大學の卒業生にして長くウエレスレー大學に史學教授たりしスミス夫人主として之にあたり、左の要目に隨て之が教授を開始し居れり。

(第一)家婦の經濟的任務
(第二)家屋建築法
　(1)位置、礎及大躰の造搆
　(2)内部の造搆、簡畧なる家屋の設計並に作圖
　(3)各室相互の關係
　(4)實地踏査設計批評
(第三)排水管並に下水
　(1)黴菌論
　(2)排水管搆成法の大意。物置教室浴場下水溜等の排水法。
　(3)清潔法と黑死病
(第四)換氣法
(第五)暖氣法及燃燒の原理
　(1)ストーブ暖爐蒸氣熱湯
　(2)燃料の種類及價値
(第六)光――ランプ瓦斯燈電燈
(第七)器具論
(第八)食品論
　(1)食品化學
　(2)食料品の取り合はせ
　(3)調理化學
　(4)學生及少年の食物
　(5)肉食論
　(6)菜食論
　(7)飲料品
　(8)調理用器具
　(6)市場の需要供給
(第九)家事論
　(1)家事勞役の統計學上經濟學上社會學上の原理
　(2)共同生活
　(3)時間仕事と受合ひ仕事
　(4)自らのためにする勞役
(第十)家事經濟
　(1)計算、取立書及請取書
尚ほ修學中評議員の邸宅等を訪問して實地の研究批評をなすものとす

此の如く家政學の米國社會に重きをなすに至れるの結果は、遂に我が廿六年を以て米國家政學協會なるものゝ設立を見るに至れり。爾來斯學の進歩益々著きものあることは今既に述べたるが如し。

## 婦人の監獄改良家

エリサベス、フライ。サラ、マルチンの風を聞いて起つの婦人監獄改良家として、佛教界には夙に明治廿一二年の頃、三重縣監獄教誨師に高田道子なる人ありしが、今日は杳として其消息を聞かずとか。然るに基督教界にては現今京都同志社女學校に於て、監獄學、理科學等を專攻して將來運動の準備をなせる高木梢羣女史ありとか。女史勉旃。

故植木枝盛氏の無天雜錄なる遺稿の一部分この頃自由黨々報によりて、世に公にせらる。中にいへるとあり、曰く。

男女各其一を以て、之を一人と稱すれども、深く考ふれば人間は男女(但し夫婦)を合せて始めて眞に之を一人と謂ふべし。男一人若しくは女一人にては一子を設くるとを得ざるに非ずや。蓋し一男、半人、一女も亦半人なる歟。

# 久米邦武翁の女權論

吾人は久米邦武翁が多くの卓拔なる史論を以て、悉く確說定論なりとは信ずること能はざるも、稱して其史學的正解といふの議論いつもながら、斬新奇拔にして、其論斷を立つるや、引證極めて該博に、觀察頗る犀利に此等を讀むごとに轉た敬服の至りに堪へざるもの多し。翁が近頃『神功皇后と漢の呂后』を去年十一月及び本年三月の『史海』誌上に論じて、男尊女卑を以て稱せらるゝ東洋諸國中、日本支那の如きには、往古女權の甚だ強盛なりし時代を有せしことを推論證明するもの、古來史家の多く逵せざりしの急所を衝き、論鋒一々肯綮に中りて、磬然として聲あるを覺ゆるが如し。而もこの史論たる單に彼二女傑を論ずといふに留まるに非ず、兩國女權消長史の好個論辯を見るのみにして止まず、また女權強盛の事實に基きて、日本支那古代史上、家族政治時代に於ける國家の眞相を觀破斷了し得らるゝが如くに感じて、之を讀むの壯快なる、殆どいふ可からず。而して該論の如きは、女學上好箇多趣味の一研究たるを以て、今我讀者の爲めに、翁が諄々複論また複論するもの丶中に就きて、左の如くに其梗概をあげ、其要點を示す。



○日本の女權

往古日本、男女共に國土を領して、祭政に主たるの風俗を有し、神教政治の時代に在りては、男女の國家に於ける權利に等差あることなかりき。而して其風俗は後世に傳はり、足利氏時代に於ても、なほ女の莊園を領し、領地配分を受くることを許されたりしが、後德川氏時代に及びても、女子血統を認可し、遂に現今の男子なき場合には女戶主を立つることを得るの法律に接したり。

女帝の册立せられたるは、女に權力あるの漸にして、之を創めたるものは、神功皇后なり。然れども神功皇后が胎中天皇を立てゝ、其實國政の實權を專擅せし所以のものは、神代以後家族政治の帝王政府に於て、皇室と貴戚との聯合同盟して、威力を張るに當り、婚親を結ぶといふことの最大有効なる結合力あるによりて、女子の關係の重く、從つて女子に權力の歸せしによらずんばあらず、古來朝廷に大權を得たる族氏は、みな其原因の外戚の緣によらざるはなし。而して事の如斯きを致せしは、即ち女子の國政に大關係ありし好證たらずんばあらず。

○支那の女權

舜が堯の二女を納れて、帝位に就きたる、殷の妲己に滅びたる、みなこれ婦人の國家に干與することを輕からざりし例證たらずんばあらず。支那古來女權の盛なるあり、周の王業は姜女、大任、大似、邑姜が外戚の權勢を併せ齎して、大に輔佐をなせしにより、而して西周の滅びしも亦申后褒后が繼嗣の爭亂によれりとす。申后と褒后との繼嗣の爭ひは、即ち武王の母家と、成王の母家と繼統を爭ふたることなり。之によりて見れば、周は女權の盛んなる望月の期とも謂ひつべく、而して周以前の政治上に在りて、女權の抑壓されしことは事實に非ず、却て女權の動もすれば重きに過ぎ、爲めに國家の危難をも引起することを慮かる程にてありしより、牝雞の晨するは家の索るゝ基なりなどいひて、女權の抑斥を試みたるなり。

齊桓公が覇業の破れたるは五夫人の繼嗣を爭ふたるによれり。

支那にて婦人を抑壓して國政に預からしめざるに至りしは、秦始皇より其漸を成し、漢呂后に至りて、成就したるものなり。秦始皇や痛く婦人を抑壓して、國政に干與せしめたるの跡なし。然れども、其國の胡亥二世が陰謀に因て太子扶蘇を始じめ、諸王子の屠殺され無慚の血を流すに及んで、一人も强宗なる母家の、其謀を打破するものなく、遂に其國亡びたり。

漢高祖の鴻業は、また呂氏の事業なり。されば男子にして高祖が天下に帝となれば、女子にしては呂后が天下に后となるべきは、明々白々たる倫理なり。然るに高祖已が宗族に私して、呂氏の一統を恤まざりしが故に、かの呂氏の亂あり、之れ無乃呂氏の爲めに憐むべきの事なりとす。漢や呂氏に懲りてより大に女權を抑へんとしたるも、天下に母なきの國なく、後に竇嬰、田蚡の富貴、衞青、霍去病の大將軍たる、王莽の簒奪をなせる、みな女權の餘光を仰ぎたるによらざるはなし。

如斯くに翁は日支兩國女權の消長史を叙して、而して此等の國家と、それ等の時代に於て、女權の强盛なるべき理由を論ずるに以下列擧するが如きの語あり。

家族政治の政躰に於て、國母の政務に與かるを制するは、人情に悖戾したる事なり。

國家の統を垂るに妻を婢妾の如く侮蔑して「一己が宗族にのみ福利を專有せんとするは、危險極つたる事と惴恐するに餘あらん。

帝と后と相匹して天下の男女に關係するは、人類自然の正則なり。一二の利害を執へ之を無理に抑壓せんとするは、逆戾の所爲にして、決して國家の幸福に享るべきものにあらず。歷史に著はれたる內外古今の事實は、男子のみに偏任して、女子を國家の外に排斥するを得べきものならぬ例を示さゞるはなし。

翁が所說眞に俗論を離ると遠しといふべし



# 卒業の女學生

左は明治女學校本學年の卒業生十七名に對し、卒業證書授與式の式場にて、嚴本が讀み聞かせたるものなり。

本日卒業の諸子に告ぐ。諸子螢雪の苦學を積み、今日の祝福に會ふ、單り諸子の光榮とするのみにあらず、亦本校の慶とする所、亦更に日本女學の幸とする所ならん。夫れ、流行に浮び風雲に乘じて一時の進步を爲すは易く、逆流逆風に向ふは難し。曩に女子敎育非難の聲甚だ騷がしきの時、諸子は慨然として志を起し、四方の學友落々として半途學を廢するの央ば、諸子は屹然として立ち、遂に能く初念を貫徹成就せられたるは、余が特に慶賀する所なり。本年に入りては、吾校不慮の災厄あり、一朝校舍灰燼に歸し、十年の室家忽然として消失せり。諸子が終末の一學期は、尤とも多忙尤とも慘澹たる事變を經たり。然れども、諸子、毫も屈せず、餘燼尙黑く、殘灰屢ば起り、四方極めて荒凉たるの中に、依然として學に力め、枯木の悄然として學窓に映ずるを侶として、寂寥を歎たず、殘舍往來に接し、騷囂の聲近く聞ゆれども、其喧ましきを憂へず、泰然自若としてその修業を卒へられたるは、余

が實證措く能はざる所なり。夫れ、天地に書を讀み、日常に歴史を考へ、躬行實踐の間に、學問の精華を摘まんことは、諸子の常に聞き、亦常に鍛錬する所に非らずや。諸子、吾校にありて、定課を修るの間、既に此の二樣の大なる經驗を得たり。而して、諸子、其修養を受けて、今や亦た其鍛錬を卒へんとす。余が特に感激して其勞を慰さむる所なり。嗚呼諸子、既に一段を了て一階を登らんとす。茲に稱して卒業となし、祝して其慶を賀すると雖ども、卒業の時即ち始業の時たる所以の覺悟は、諸子が夙に久しく聞く所に非らずや。諸子が前程には、新しき人生の學校あり、新しき實際の敎師あり、新亦しき賞罰と褒貶とあり、諸子や亦た新勇氣を鼓し、新元氣を起して、新らしき學科に入らずんばある可らず。抑も去るものは來るもの丶影なり。此の影漸やく朧氣なれども、來る者實地の感觸は層一層に强し。惟ふに諸子、之より千態萬狀の事變に際會し、喜憂哀樂の情激甚ならん。蓋し人生の苦樂は相半ばす。余は諸子が幸福を想ふと共に、其悲慘を想ひ、ことに其悲慘を想ふと共に、其の痛苦を想ふ。左れど、皇天皇帝の下、無益の涙と限りなきの恨とあることなし。諸子順境に能く謙り、逆境に能く勇み、所在る遭遇を學科として、肅然として座し貞靜閑雅、徐ろに其の御敎を受られんことは、余が送別に臨んで、尤も深く所望する所なり。余は亦此席上に、諸子が同窓の友たる島田愛子の無きことを痛く惜しむ。爛漫たる十分の櫻花を眺むるの人よ、昨宵風一枝に過ぎりて、半開の花先づ落ちたるを歎ぜざるを得る乎。今夜燈火の影、一人を缺き、諸君の席一座を減ず。左れど花落ちて花影尙あり。諸子が胸中長久に之を存し、吾校の歷史亦之を消さじ。但だ希望すらくは、諸子將來深く其身躰を重んじ、謹んで其生を衞られよ。諸子が身躰は尤も多く父母の慰籍の掛る所、亦吾校の尤も切に憂慮する所なり。諸子必らずや之を健全にして、其智德を長久に發揮せられよ。今や同窓一列の諸子、將に相別れんとす、望むらくは互に相盟ひ、此送別の語を分擔服膺せられよ。

谿にちる花は谷なる水にぞさく
いたくいさはト春の山風

# 評論

## 福澤先生の大悟徹底

井上次郎

福澤先生を指ざして「彼の詩人を看よ、彼の宗教家を覗よ」と言ふものあらば、世人大率ね愕然として之を異しむなるべし。左れど、余は年來斯く言ひて、屢ば人を驚ろかすとのありしものにてありき。

然れど、之を詩人とし宗教家として、一種專門の人の如く言ひ做すとは、先生の本懷にもあらず亦余が本旨にもあらず。寧ろ言はんとす、先生、頗ぶる詩想に富み、亦よく宗教的大悟の域に達したりと。蓋し錢を主張して拜金宗を起し、娼妓を親鸞弘法に比らべ、正成の打死を權助の首くゝりとなし、大名の一夫多妻に適種生存を覺り、辨慶の嫁に十二三の少女の無理なるとを辨じ、茶碗のコワレに演繹法を考へ、遂に今や臺灣に公娼の設置せざる可らざるとを烈告するなど、等しく亦た此の詩味あり、宗教觀ある文士の唱ふる所ろと知らば、よつて以て其の偉大を證知するに足らん。

凡そ一藝に達するものは皆な道に達し、一事に熱するものは、皆な大悟を得べし。而して、此の達成を助け、其の忍耐を慰さめ、激して且つ樂しましむるものは、大率ね其詩歌的の美想なり。此を以て、美の觀念あり且つ事業に熱するものは、遂に宗教に達す。先生を明六社中の諸先輩に比較し、翻つて其の近作「福翁百話」を讀まんものは、如何に宏大なる實例を此の通理の爲めに玆に看取し得べきかを覺らん也。

先生屢ば曰く、物に凝ると勿れ、人事は大抵程好き所ろに畱くを妙とすと。青年の士、之を聞きて誤解せざるもの尠なく、慷慨義烈の人、之れを聞きて憤ぼらざるものはあらず。左れど、猫の柔婉なるは、其の猛性を鍛へたるの反證なり。先生の屢ば「凝る莫れ」と云ふ所以のものは、則ち先生自己の鍛練の玆に尤とも多く意識せらるゝ所ろ、眞とや夫子年來の苦辛のある所ろ、刻骨練磨實に此に存せしとは知らずや。蓋し先生の熱血執着や、先生をして夜冲々として眠らず、半夜成敗を氣にして屢ば起つて徘徊せしめたるもの、先生ひとり靜修して遂に其の超脫を得たり。頓悟して意へらく、物に凝る

可らずと。此義、先生所得中の第一のもの、故に先生亦珍重して屢ば之を言へり。

左れど、如此き頓悟は甚しも珍らしきとにあらず。古來の幾千人、人事の幾百藝、其品其人異なると雖ども、道に達すべき程の地位に於て之を言はゞ、皆な何れも此處の消息を傳へざるはあらず。所謂る、執着する勿れ、拘泥する莫れ、迷ふ莫れ、成敗利鈍を思ふ莫れ、蓄き生命を棄よ、恍惚たる無意識の界、睡不睡の妙味に入れよなど言ふ所ろのもの、皆な同旨同段の敎訓にあらざるはなし。

故に、一と度び事藝に熱して而して之を破し、之を破するとに熱して而して亦た之を破し、破々に熱して亦質に之を破し、忽然大悟徹底して、所謂る其『妙』に達したらんものに於ては、一藝の士の其悟りに於て主張する所ろ、もしくは、其の悟りを不言玄默の姿に置く所、又もしくは矯激反動の奇語を弄して屢ば人を驚ろかせ以て人心の片半に執泥するを醒まさんとする所ろなど、歴々として其眞主旨を明察し、至誠忽ち默契して、了々として頓悟せざるとはあらじ。福澤先生の如きは、獨り此類の知己に待つものならん。



玆に「福翁百話」を取りて讀みもてゆくに、詩想の掬すべきもの、大悟の隱見するもの、所々にあり。而も、其多くは青年士女をして眞旨を誤解せしむべきものなり。之れ寧ろ遺憾ならずや。試みに、其の多少を引證せん。

曰く、事物を輕く視て始めて活潑なるを得べし。人間の心掛けは兎角浮世を輕く視て熱心に過ぎざるに在り、斯く申せば天下の人心を冷淡に導き、万事に力を盡すものなかる可きやに思はるれども、決して然らず、浮世を輕く視るは心の本躰なり、輕く視る其の浮世を渡るに活潑なるは心の働なり、內心の底に之を輕く視るが故に、能く決斷して能く活潑なるを得べし。

評に云く、純然たる禪僧の悟道と同じ。但だ、禪に於ても屢ば誤解せられ、之を以て白眼世を冷視し、事物に熱せざるとにありなど思惟するもの多きと同じく、此文の意味も亦多くは誤解せらるべし。

曰く、恵與は人の爲に非ず。況んや我惠與の物とて、誠に些細にして嚢中を輕重するにも非ざるに於てをや、花鳥風月天然の美を見ると思へば誠に價の安きもの也。一切の寄

附寄進義捐等も都べて是れ先方の爲に非ず、自分の慈善心を滿足せしむるの方便とあれば、必らずしも人に名を知らるゝの要用はある可らず、知らるゝも差支なし、知られざるも亦可なり、其邊は自然の成行に任せて意に介せざるこそ大人の事なれ。世間或は慈善の事を行ひ乍ら、人に知られんことを恐れて故らに名を隱すものあり、又或は態と世の中に公けにして名聞を買はんとする者あり。名聞の爲に慈善とは俗物の事にして心の調子の低くきものなれども、左ればとて色々に心配して之を隱さんとするも亦全く脫俗したるものに非ず。花見に出掛けて人に面を見らるゝも見られざるも頓着するに足らず、我は唯だ花を見て愛美の情を滿足せしむるのみ。

評に云く、先生平常の言動行爲面のあたり見るが如し。」

人間の心は廣大無邊なり。人生は見る影もなき蛆蟲に等しく朝の露の乾く間もなき五十年か七十年の間を戯れて過ぎ逝くまでのことなれば我一身を始め萬事萬物を輕く見て熱心に過ぐることある可らす生まるゝは即ち死するの約束にして死も亦驚くに足らず况んや浮世の貧富苦樂に於てをや其浮沈常ならざるのみか貧者必ずしも苦痛のみにあらず富者必ずしも安樂のみにあらず唯是れ一時の戯にして其時を過ぐれば消えて痕なきものと知る可し之を根本の安心法として深く胸の中に藏め置き扨今日の浮世を渡るに其法を如何す可きやと云ふに蛆蟲は素より蛆蟲にして假令ひ高尙なる心あるも蛆蟲と雜居しながら高尙なる手段を施す可きに非ざれば生を愛し死を惡み貧富苦樂を喜憂して浮世の務を務め苦しみては樂しみ、樂しみては苦しみ苦樂平均して樂の多からんことを願ふは勿論、……初には人生を戯と稱して死も亦驚くに足らずと云ひながら渡世の法に至れば生を愛し死を惡み辛苦經營して快樂を求めよと勸む、前後不都合なるに似たれども元來人間の心は廣大無邊にして能く理屈の外に悠然たるを得べきものなり一方より視れば火事も病氣も驚くに足らずとして平氣なることそ道理なれども他の一方より實際に當れば驚かざるを得ず否な其これに驚く者にして始めて人間の本分を盡す可し孰れが是か非か人の心の二樣に分るゝ所なれども一心能く二樣の働を爲して相戻らず即ち其廣大無邊なる所以なり人生を戯と認めな

がら其戯を本氣に勤めて倦まず、倦まざるが故に能く社會の秩序を成すと同時に本來戯と認るが故に大節に臨んで動くことなく憂ることなく後悔することなく悲むことなくして安心するを得るものなり。

許に云く、此文尤とも先生の『得たる所』を顯明す。悠々迫まらざる文字の下、熱血あり、熱涙あり。

此他、人生を戯と稱して、俗界百戯の中に雜居して獨り時に戯ぶれざるの所存を表明し、又、天道人に可なりとして、之に拜謝せざるは即はち怨望せざる所以と覺悟し、天道是か非かの大史公の不平は甚はだ狹き見識なりと嘲けるなど、文字以外、確かに一道の悟りを發揮す。

只だ殘り惜しきは、先生の己惚れ時々所々に顯はれ、讀者を眼下に見、世人を愚物の如く言ひ做す邊、人をして不快禁ずる能はざらしむ。先生自から其の偉大を意識し居らるゝと、深く惜しむべし、眞に偉大なる人は無意識なり。故に大賢は愚なるが如く、大人は小見に似たり。先生もし其偉大を誇らんとせらるゝならば、何人も感服はせじ、所謂ゆる凡俗に至つて特に然かなり。左らば、特更らに文章を起草さるゝ必要も



あるまじ。苟くも世を救ひ人をして悦服せしめんとて、文字を公けにせらるゝ以上は、須からく讀者と同地位に立ち、其品格に同情を有ちて説法せられたきことにあらずや。然らざれば、先生が説き聞かさんとせらるゝ所謂ゆる凡俗は、遂に先生の説に耳を傾ふくることなけん。

然れど、先生は其説法に於て眞旨を諒解せらるるとの寧ろ少なかるべき人也。此意味に於て、余は先生の文を通俗ならずとは言ふ。たとひ其文字にして通俗なりとも、其の悟らせ方の能く通俗ならざるときは、何んぞ之を稱して眞の通俗と言ふことを得んや。寧ろ及かず、たとひ六かしき解し惡き文字を列擧すとも、知らしめられず由らしめられたるの意味に於て悦服信仰するに至らんには。果して然らば之をこそ其實に於て通俗なりと言はめ。故に余は寧しろ先生の説法文の今一層通俗ならんことを求むるもの也。

玆に「福翁百話」の讀者に告ぐ。人生を戯と云ひ、事業に凝る莫れと言ひつゝある此の老先生は、勤勉周密、拮据慘憺、日日、臺所の隅迄で注意し、新聞の雜報迄で校正し、現時の新聞記者中、尤とも愼密熱勉なる人にてあるとぞ。又、此の敎

育者に聞かば、當に言ふなるべし、敎育の効能とは知れたるもの也、學校は、人を善くする所にあらず、悪しくさへせねば好き耳、學問と敎育とに凝り固まるは大馬鹿なりと。而して、此の冷淡らしき人は即はち明治年間第一等の敎育者にてあることを。故に告ぐ、「福翁百話」の讀者よ、請ふ其文字の裏面を見よ、直ちに其激語を面にうくる莫れ。何んとなれば、其文の至つて通俗ならざるが故に。

## 薄情の辨

なにがし記

人を是非論評せんと欲せば、須く先づ其境遇、位置、敎育、性情及家庭の狀態等を觀察し、而して後始めて之を試むべし。然らずんばいふ所往々にして無慈無殘の言をなすに至り、無辜の人を精神的に殺戮するが如き悲劇を演ずることなきを保せず。人の行爲の社會に所謂道義に反するものあるを見て、直ちに譏るが如き斷じて不可なり。素より吾人々類が社會を組成し、之に其籍を連ぬるの結果、社會道德に反くあるの故を以て、其安寧秩序を保全するの主意より社會の之を罰するやよし。然れども『人』としての彼れ—市民ならざるの彼れは、この我儘勝手なる杓子道德によりて、審きせらるべきものに非ず。千變萬化極まりなき一大パラドックスたる人心、豈に漫に嘲せらるべきものならんや。人心の或る一定動かすべからざるの定木によりて律すべきものに非らずして、時に天使の如く時に惡魔の如く、善中惡あり、惡中善あり、撞着矛盾得て窺ふべからざる是れ即ち靈の不可思議なる所以にして、妙味自らこの間に存す。かの世に薄情の譏を蒙る子女の如き、その實決して惡意あるに非ず情に薄きに非らざるも、世人が此の人心の妙機を悟る能はずして漫に下す是非の論鋒にかゝり、社會の口に上れるのみ。我れ深く是等尋情感なる人士のために泣く。もし言を切にして之を言はゞ、かの博愛の如き亦薄情の別名に非ずや。借問す博く人類を愛するの人是れ情に薄きの人乎。

世廣く男性に接するの女子あり、又女性と常に往來應接するの男子あり。是等の人やゝもすれば不知不識の間に所謂薄情の譏を受くるに至る。彼等の多情なる者多感なる者、今日甲

を愛して明日乙に移り、又丙に轉ずる如き殆んどその常なり。然れども彼等は決して是によりて前者を其腦裡より削り去りたるに非ず、否な却つて是がために苦み、之がために泣く。然るをなほ且つ好で多くの人を愛する所以のものは、彼等の情に富める常に渇望をその衷心に感じよく一人の愛を以て滿足すると能はざるが故のみ。加ふるに人は新を好み變化を悦ぶもの、若し西鶴の言を借りて之を言はゝ移氣あるものなれ。されば其此所に至る豈に必ずしも一概に咎むべきものならんや。殊に婦人の感情的にして情に脆き、數々情に迫まられて思はざるの道にすゝみ、不貞の名をあぐることあるが如き、實に憐むべきものたるなり。われ此等情熱の婦人に對して同情の念禁ずる能はず、玆にこれが辨を綴る。

| | |
|---|---|
| 西樂と幸田氏 | めざまし草第三號 |
| 都會の婦女子と田舍の婦女子(秋亭主人) | 大坂毎日新聞(四月三、四日) |
| 女子の職業 | 報知新聞(四月九日以下) |
| 婦人と監獄(本多澄雲) | 東京慈善新報(第一號) |
| 露國怪傑傳(露國女帝カザリン第二世)(三旦) | 自由黨々報第百六號 |
| 神功皇后と漢の呂后(久米邦武) | 史海第三十六號 |
| 女子を清潔にすべし。 | 旭光第二卷第四號 |
| 佛教に於ける男女夫婦の道を論ず(承前) | 救世の光第六十一號 |
| 眞宗の母(小栗栖香頂) | 東北の光第十八號 |
| 女性と高等教育(寺田勇吉) | 統計學雜誌第百二十號 |



# 教育

## 躰育問題

戰爭の影響として、社會全躰が尚武的に傾向し、村落田園の間にさへ、一時は竹刀戞々の聲の囂しかりし事あり。殊に教育上に於ては躰育甚だしく注意せられ、各府縣の學校共に是が奬勵に一時を忽せにせざるの有樣なり。されば曩には智育の過度によりて苦しめられたる兒童は、今後更に加へらるゝに躰育過度の苦痛を以てせらるゝの虞なしとせず。而も既に某々の地方に於て其形跡の認めらるゝものありとさへ傳ふ。而してかく躰育の注意せらるゝと共に、其源流に溯りて、日本人の躰格に關する問題は此頃殊更に注意せらるべくなれり。

文部省參事官寺田勇吉氏が、去年十月教育時論社に依頼し、『日本人不健康の原因を論ず』てふ懸賞論題を以て、廣く有志の論文を募集せしもの、此頃既に優等文の撰擇を終り、某々の四氏其賞に當りたりといふ。而して應募せる幾多の論文に就

きて、人々が指摘せる日本人不健康の諸原因を類別製表したるもの、近刊の教育時論に在り、今爰に該表中の要旨を總合して見れば大畧左の如し。

### ○歷史上の原因

徳川氏太平の政治○佛敎の感化○維新以後の偏智育○衛生の不完全、等

### ○先天的原因

體格短少○疾病遺傳○資性短慮

### ○個人衛生上の原因

早婚の害○血族結婚○不良結婚○婦人運動の不足○多淫房事の不謹愼○德性缺乏○齒牙の不養生○飲酒喫烟○暴飲暴食○食事不正○肉食缺乏○湯茶類の適度使用○妊娠月經時產蓐中の不攝生○永時不安○不熟の菓物を食し、魚菜を生食し腐敗し易き食物を用ゐること○兒戯の不自然○兒童精神過勞○冷水浴及び潮水浴の不足○早熟○精神作用を好みて身體的作業を嫌ふこと○大男を賤むこと○帶を固く縛すること○衣服健康に適せず○聽官を養ふの不注意○衣服等の破損を恐るゝこと○男子が柔弱なる女子を好むこと○女子が白色の男子を好むこと○女子自ら纎弱なるを好む事○宜しからぬ模範を後生に示すこと○シャツ、手袋、襟卷を用ゐること○少成を安じて、人生の大觀に不注意なること○心意規律○生活の低度、等

### ○家庭衛生上の原因

兩親が衛生上の思想及智識に乏しき事○子女に愛溺する事○嬰兒の保溫法清潔法の不完全及び哺乳法の不規律○恐怖の念を抱かしむること○就學及び就職を急ぐこと○子供を背負はすること○家屋構造の不完全及び寢臺なきこと○子供の溫順なるを貴ぶこと○不純なる乳を小兒に與へ又乳母及び牛乳にて育つること○衣食住に一定の習慣なきこと○室内の炭火使用○炬燵の害○小童期攝養の不注意○幼兒と父母及び祖父母との同衾、等

### ○學校衛生上の原因

校舍及び器具の不備○換氣法採溫法○學科高尙多量腦力過用○運動の不完全○食事上の管理不行屆○視力過用○机腰掛の不適當○白堊の飛散○早學○教師の衛生的思想缺乏○塵埃○試驗○姿勢不良○寒暑保防の不注意○教室に窓掛なきこと○外國語の研究○學校醫の不備○教師の溫順奬勵○草履に附屬する有機質傳染病患者に對する觀察不周到○小學以上の教授者が躰育の輕視、等

### ○公衆衛生上の原因

共同用水の設置不充分○空氣を淸淨にするの習慣なし○洋服と和服との併用○家屋の低構造○宗教的迷信の害○上下水の疏通不良○世間に中毒物の多きこと○厠構造の不完全○傳染病注意の粗漏○醫者缺乏○藥價不廉○河流の汚物投入○塵埃及び魚腸等腐敗物の堆積○演藝場の衛生不注意○不熟菓物及び腐敗的食物の販賣○一般に勞働事業を賤みたる事○武藝衰へ藝娼妓の存在せる事○人民の體育を重んぜざる事及び國戯の不定○吝嗇、勞働の時間多きこと○アルコール飲料の儀式に用ゐらるゝ事○滊車の流行、等

日本人不健康の原因につきて種々の人が、種々の方面に於て觀察をなしたる結果は大畧以上の如し、扨て又三月下旬日本體育會演說會に於て三島通良氏が『本邦人は現在の體格を以て滿足すべき』を演述して、日歐人の躰格を比較したるは頗る注意すべきものなり。

三島氏が自ら日本小學校の生徒に就きて調査したる躰格と、獨乙のエミール、ジミットがサルベルトの學校にて調査したるものとの比較を見るに、

滿六年以上十四年以下學齡年間に於て日本小學校生徒の躰格の獨乙小學校生徒に劣れることは、

身幹に於ては

男兒平均一寸九分　　女兒平均一寸八分

體重に於ては

男兒平均九百三十四匁　　女兒平均五百八十七匁

にして、また日歐兩人に就き三十年より四十五年まで即ち成人したるもの丶比較として氏の擧げたる處を見るに、

身長に於ては

| | | |
|---|---|---|
| 歐羅巴の男子 | 平均五尺五寸四分 | 差二寸九分 |
| 日本の男子 | 平均五尺二寸五分 | |
| 歐羅巴の女子 | 平均五尺二寸一分 | 差三寸七分 |
| 日本の女子 | 平均四尺八寸三分 | |

體重に於ては

| | | |
|---|---|---|
| 歐羅巴の男子 | 平均十七貫三百目 | 差二貫三百目 |
| 日本の男子 | 平均十五貫目 | |
| 歐羅巴の女子 | 平均十五貫六百目 | 差二貫六百目 |
| 日本の女子 | 平均十三貫目 | |

なりと。また兵士躰格日歐の比較は身長に於て、

獨乙の平均五尺五寸八分　露國の五尺五寸七分

佛國の平均五尺五寸五分　日本の五尺四寸二分

然るに又支那人が成人の身長は平均五尺五寸八分なり。支那には五尺三寸以上殊に五尺六寸以上のもの尤も多けれども、日本には五尺三寸以下のもの尤も多く、五尺六寸以上のものは、百中僅に〇、九八あるのみなるに支那に至りては實に一七、八一の多きを有すといふ。



日本兵士の身長五尺四寸二分、これ三島氏が十年間十万餘の兵士に就きて調査したるの結果のよしにして、氏のいふ所によれば、此丈けの身幹を有せるものは、なほ日本に存在せりと見て可なるべく、さらば本邦人の躰格は少なくとも此の身長に達し得らるべきものなりとあり。同會に於て又長谷川泰氏は『國民軍編成の實施』を演説して、政府が遼東半島還附の償金たる三千万兩を戰爭紀念として、各府縣市町村小學校躰操の補助費奬勵費として積立て置き、其利子を年々下附せんことを請ふといひ、また第二には、又全國の壯丁を悉く狩り集めて、毎年三ケ月間兵式躰操を敎ふるの法を立て、徴兵令第十一條尋常中學校生徒徴兵猶豫の特典を廢し、又公費を以て各府縣の樞要なる部分に躰操場を設立せんことを欲すといへり。其成蹟や一朝事あるの時に立處に數百万の兵を動かすを得んとなり。

日本人の躰格の大に發達强健ならしめざるべからざるとは、單に戰時の較力に備へ、又た平時の敵愾心を發起せんが爲めにのみ然るに非ずして、我日本國が社會万般の進歩に於て要する所なり。されば乞ふ其路に當れるものは素よりの事、天

下の識者先達も、また其策を盡くして、其奬勵振作に勉めんとを。しかも其事に於けるの熱心が、時世の機運に乘ずる一時の敵愾心の發作に激せられ、暫らくしてまた止むものならざらんをと祈る。

## ○西園寺文部大臣の教育意見

吾人はまた文相が教育意見に接するとを得たり。左は即ち同相が去月末日高等師範學校卒業證書授與式に於て、中川秘書官をして代讀せしめたる演說草案要領なり。曰く、

諸君今や我帝國は勃興の氣運に際會し、百事擴張を要するの時なり、此時に當り諸君は多年勉强の結果を收めて、社會に出でゝ之を實地に試みんさせらる、其責も亦重しさいふべし、教育の方法如何の事に至つては、諸君は既に專門家たり、本大臣の贅言を要せざるべし。本大臣は諸君に向ひて單に一言の注意を懲かんさ欲す、本大臣惟へらく國民の氣象は宜しく活潑爽快なるへし、慷慨悲壯なるべからず、宜しく正大有爲なるべし偏曲奇僻なるべからずさ。本大臣曾て之を古書に聞けり、人の常に欣然たる百德の本源なりさ。然るに世間往々衰世逆境の人を摸範さしては今日の青年子弟に濡式せしめんさ欲するものあり、是れ害を他日に遺すものにして、國家今日の隆盛に背馳するものさ謂はざるを得ず。諸君は常に此に注意し、且つ廣く世界列國の趨勢に鑒みて、文明の消長する所以を察し、以て我邦の教化を翼贊せられんこさを望む。

これ實に曾て嚴文相より聞きたる處のものさ同一の意見なり。天下教育の大道實に如斯に經由せざるべからず。然るに文相の教育意見を公にするや、常に或一派者流の反對攻擊を買ひ、遣回さても然ると多きるは、實にいはれなきの事にして、殊に日本新聞が平素の謹嚴なる筆法にも似ず、之に罵詈を加へたるに至りては、



尤も謂はれなきの事なりさす。

## ○教育と犯罪との關係

統計家に信夫淳平氏あり。近日統計學上より、社會の犯罪の狀態を觀察して、左の如き頗る有益なる事實を示さる。

教育の進步は犯罪を增加せしむる事實あり、殊に風儀上の犯罪大に進み、畢犯殺兒婦女罪等多し、今統計學に所謂四の程度により各級に最も多き重罪を擧ぐれば左の如し、

一　無學文盲の者
　殺兒　幼者誘拐又は藏匿の罪　暴徒加盟　盜賊　刧掠　放火罪

二　僅に讀寫を知る者
　爲替手形の强奪　文書上の脅迫　財產の刧掠　破壞毆打創傷

三　初等教育を受けし者
　收歛及收賄　商業上の文書及私書の僞造　書面上の脅迫

四　高等教育を受けし者
　商業上文書の僞造　官吏の職罪　公文の僞造　監守文書の竊取　公けの靜謐を害する徒黨

概して有教育者は疎暴なる犯罪少きも、詐僞罪の如きは却て無教育者よりも多きなり、今日各國の刑法を見るに、孰も信用に關する罪なる條項を設く、古代の羅馬法には特に此條項なし、是れ亦歷史上より犯罪さ教育さの關係を察する一助たるべしさ信ず、

經濟雜誌者之を評して曰く

信夫氏は新思想を有するの人さ云ふべし。經濟眼を以て之を見れば、教育進步して犯罪增加するは、畢竟教育の進步さ富の增加さの伴はざるに由らずんばあらず、未だ富みて而して盜をなすものあるを聞かず。世の妄りに教育を奬勵せんさするものは宜しく鑒むべきなり

さ。是即ち經濟子が教育意見の一端を窺ふに足るべきものさす。

## ○久保田譲氏が將來の學事意見

嘗て文部次官の顯職要路に在りし久保田譲氏は先つ頃『明治二十九年度歳計豫算に對する學政上の意見』を論じて學政施設の緊急要項に及ぶ左の如し。

一 高等教育會議地方教育會議を起して教育行政機關を鞏固にし大に學政を振興すべし
一 文部省に大視學官を置き全國五地方部に各督學局を置き府縣に學務部を置き郡に專任學務官を置き其經費は皆國庫支辨とし高等教育より初等教育に至るまで大に監督の實を舉ぐべし
一 國庫より教育補助金を支出して就學督責規則を勵行すべし
一 尋常師範學校教員の俸給を悉く國庫支辨に移し其餘資を以て大に生徒を增加し以て小學教員充實の方法を定むべし
一 中學校令を改正して中學の設立を規定し及中學組織の改良并に教員の供給を圖るべし
一 高等女學校を增設し女子教育を獎勵すべし
一 實業學校を增設し及其教員を養成すべし
一 各高等學校に專門科を增設し漸次に大學豫科を廢止すべし
一 大學を增設し更に大に海外留學生を增加すべし
一 國立博物館を設立し圖書館を擴張すべし
一 私立學校宗教學校の取締法を設くべし

## ○教育議案

本年度第九帝國議會は、議會ありて以來始めて、教育上議案を以て賑はしくされたり。曰く市町村立小學校教員年功加俸國庫補助法案、公立學校職員退隱料に關する法律案、清國償金の一部を以て普通教育の基本金と爲す建議案、外國語學校設立建議案、帝國圖書館を設立するの建議案、國費を以て小學校修身教科用圖書を編纂するの建議案、國費を以て國學院を保護する建議案、高等學校を獨立せしむる建議案等なり。此等は皆可決せられ、政府の承認も追々下りつゝあり。

## ○小學教員待遇

其職責の頗る重大にして、其地位待遇の甚だ卑下なるものは小學校教員なり。如何にして其待遇を宜くし、其地位を高め、而して其職責をして益重からしめんかの議は、蓋し各國の教育界共に憂慮審議するの問題なるべく、同問題に就きて、近來米國アトランチック、マンスリーは質問を發せしに、之に答へたるもの二ユー、メキシコ及びオクラホマの二州を除くの外米國の各州の教育家千百八十九名あり、また此等の答案に就きて有名なる博士スタンレー、ホール氏の意見を述ぶるとありたりと聞く。我國も亦此問題解釋の必要に逼られ、遂に政府は第九議會に其二法律案を提出し、議會もまた之を可決したるは、教育界の爲めに賀すべし。然るに此頃怪報を聞くあり、曰く現今小學教員の月給は辭令面を見れば、たとへば十圓のものも、こはたゞに表面のみ、内實給與額は七圓乃至八圓となり居れりと、夫れ果して眞乎。

## ○基督教學校の變象

基督教主義學校の變象して、尋常中學制度を遵奉し、既に文部省の特認を受けたるもの、大阪の桃山學院、奈良の私立尋常中學校、東京の東洋英和學校、青山學院、立教學校の五校にして、同志社も同樣の變象遠きに在らんとし、明治學院、弘前の東奧義塾も亦かくの如くならんことを欲すと。吾人は此變象の是非をいはず、たゞ此等の學校の中には、國民の教育には尋常中學制度を遵守せざるべからずとして變象したものもあらん。また時には去り行かんとする生徒の足を留めんとてせしものもあるべし。

○國學院保護

國學院保護の建議案は無事兩院を通過したり。貴族院の提出者玉松氏其建議案の主旨を説明して曰く

國學院が生徒を敎導する目的を見るに、國民をして內外本末を誤らず、必ず先づ本邦固有の學術を研究し、皇室の尊嚴なる所以、國體の鞏固なる由來を明にし、人情の基く所、風俗の由る所を繹ね、國民忠愛の精神を發揮し、又智育をして國体に於ける德育と併進せしめ……且又同院既往の成績を見るに、同院卒業生の數凡そ百名、何れも師範學校、中學校等の教師、又は官吏、或は實業家、著述家、其他公共事業に從事せるもの大抵然り、惟ふ國家的精神の稍々勃興し來る今日の世態に向ては國學院の力與つて少なからざることを信ずるなり云々

と、如斯きを以て、此建議案や累々たるに兩院六百議員の頭腦を故障なく通過したるん。

○敎育費

文明の世界とはいへど、未だに獸力の最上權を握り居るぞ悲しき。久保田讓氏によるに廿九年度歲計豫算にては文部省の經費二十一萬餘圓にて陸海軍經費の四十七分之一なりと。何れの世にか殺人費の全くその跡を絕つに至るべき乎。

○豫算成立敎育案

曰く京都帝國大學設立案、曰く大坂工業學校設立案、曰く醫科大學、東京美術學校及び留學生擴張案、曰く學校衛生取調費新設案。此等は皆な兩院の可决を經て、今や文部省が將來の大事業として、前程に橫たはれり。

春風の花のふゞきに埋もれて
ゆきもやられぬ志賀のやま道



# 雜録

## 基督教徒大親睦會

四月十八日、上野山內鶯亭のほとりに、府下基督信徒の大懇親會を開く。會するもの二千五百人。左は開會の趣旨として巖本が朗讀したるもの也。

曩に此會を發起して四方に檄するや、同感の聲到る處に湧き贊助忽ちに成り、則ち本日此盛會を觀るに至れり。喩へば、鐘響きて花開き、春來つて鳥の舞ふが如し、呼ぶものと應ふるものと共に同時、妙に機に相會したるもの也。故に諸君皆な發起者と等し、本日來會するもの本日の集會を發起せり、發起の主旨豈に復た辯ずるを須ゐんや。夫れ諸君の志如此く成れり、惟ふに諸君皆な種々の感激あらん。余は今にして忽ち明治十六年の大親睦會を回顧し、坐ろに今昔の感なき能はず。蓋し當年は信仰大復興の時なりき。余や此時初めて基督敎徒となれり。憶ひ起す、當年先輩の言語は火の如く焰の如くなりき、熱烈たる其の風采と燃るが如かりし其抱負とは、今にして尙忘るゝ能はず。自今三年にして全國全地に

傳道し盡さんと言へる先輩の揚言を聞きては、余は實に基督の王國の來ると遠からじと確信し、晝夜胸躍り、欣舞して休む時なかりき。此時、府下日暮里の片ほとり某と云へる一寺院の庭内にて、全國基督敎信徒の大親睦會ありき。幹事は數日前來、諸君子が祈禱にのみ熱して甚く疲れたるを醫やさんとて、音曲の遊を趣搆したりき、箏笛三絃相和し、翕然として美の聲を發するを聞けども、人々稍もすれば祈禱に傾むき幹事が周旋に力めたるに關はらず、親睦會は遂に祈禱會となりぬ。余は、某氏が突立ち上りて、庭后に群りたる見物人に傳道したる其聲を忘るる能はず。故新島襄氏が慨然として起ち、兄弟よ!、兄弟よ!、と叫ばれたる其聲を忘るゝ能はず又、三々五々樹陰に蹲まり、或は語り或は祈りつゝありし光景を忘るゝ能はず。又、某氏が敎役者間に躍り立ち、之れより手を分つて上流士人の間に悉皆傳道せんと發議せられたる其の熱血の言動を忘るゝ能はず。當時人未だリバイバルの語を口にせず、皆云くこれ聖靈の降臨也と。吾等は聖靈の火今にも府下全面に下らんかと思惟しつゝありし也。嗚呼回顧して當日の情態を憶へば、詩の如く歌の如し。先輩多くはあり、吾人依然たり、互に今昔を比較して當年の爽快を慕へば、元氣潮の湧くが如く生命神風にあへる心地し、幕落て新天新地俄然として開けん。嗚呼、吾等歲を重ねて得たるもの何ものぞ、吾等責を加へて爲せしもの何ものぞ、恩寵昔の如く、慈愛昔の如く、救ひ昔の如し。たゞ吾等一層の職責を荷ひ、天上天下の物見人に圍まれて、國家緊要の機期に際會せり、吾等が祈り亦勵むべきは何ものぞや。蓋し、宗派相隔て、敎會相離れ、兄弟姉妹互ひに分るゝは、今にして尤とも呪はるべきものたり。諸君!、願くは至誠相盟ひ、肝膽相許し、天父の台前に同もに親しみて、基督敎黨の職責を盡さん。夫れ昨日の櫻花今日散つて足下にあり。今日相合ふの友、それ何の日迄で、相同もに生きん。生れて互ひに大日本の國民となり、列つて方今の時機に際會せり。古來の基督敎徒幾億万ありと雖ども、特に現時、諸君と兄弟姉妹の交を爲すもの偶然ならんや。願くは、共に祈り共に親しみ、相合して方今の事急を救はん。惟みるに信仰の裏面には、決死の覺悟なかる可らず、相約するには、同穴の情義なかる可らず。吾等幸にして兄弟姉妹たり、亦同もに信念を一つにす、願くは非常の

覺悟を以て、相合して非常の事に當らん。某譏で白す。

## 音樂演奏會聾評

青柳有美

◉音樂を見る　人は音樂を聽くといへども、音樂の耳なき我れは演奏會に出でて之を聽くに非ず見るなり。故に忍が岡音樂堂内の我れは是れ純然たる一介の聾漢のみ。然れども此の聾漢をして尙ほ動く所あらしめし演奏者ぞ、げにサイレンの魔力を有するものといふべき乎。

◉大觀　去ぬる四月十八日の演奏會は是れ殆んど幸田延子女史が歸朝の披露會とも評すべきものにして、同日の立役は是れ女史、其他は悉くこれ附錄の觀なきにしも非ざりしと雖ども、島崎赤太郎氏が風琴獨奏『コンサルト』の曲の如き、近來まれに見るの生氣に充され、又幾多の學生が、ナショナル第五讀本によりてその曲名を耳にせる、ビートーフエン氏作『ムーンライト、ソナタ』の、ピアノ名手遠山甲子女史によりて彈ぜられたる如き、又以て珍とするに足る。

◉ヴイオリンの弓乎將た劍乎　音樂學校の演奏會に臨む每に、常に飽き足らぬ心地のせられしは、唱歌するものゝ唯その口さきを動かすのみにて歌ひ、樂器を奏するもの、亦たゞ手さきを動かすのみにして、徹頭徹尾頗る器械的に、何等生氣その間に存せず、恰もゼムマイ仕掛けの人形が音を發し、手を運かすに彷彿たるものありしが故なり。然れども今や幸田女史がヴイオリンの獨奏を見るに、その大に之と趣を異にする所あるを知れり。女史の壇に立つや、これ音樂の權現に非ずやと思はるゝ程にて女史弓を取れば恰もかの劍客が劍を手にして、搆へし時の如く、全身の精力悉く凝りて此一本の弓と一基のヴイオリンに集れるの觀あり、その狀かの蹁躚たる小音樂士が戰々兢々として、なまめかしくも力なげに弓を摩るの類にはあらで思ふ存分の力を之にこめ信ずる所ありて之をひくものゝ如く、無限の勢はその腕に現はれたり。玆に於ては腔廓悉くこれ力、滿身悉くこれ音樂なるが如くにして其身亦ためにゆるぎ出でんとするを、なほかの長頸浮璃瑠などの名人が、興到るに及んで、思はずその身を躍らすに異ならざりし。

◉摩るが如し吹くが如し叩くが如し　某といふ夫人語て曰く、我れ數ゝヴイオリンの演奏を聞くに、その凡なるものは素より弦と弓と相觸れて摩らるゝが如き音に過ぎずといへども、その稍々名手と稱せらるゝものに至れば、等くこれ弦等くこれ弓なるに過ぎざるも、恰もかの吹奏樂に用ゐらるゝウインド、インストルーメント（風通によりて發音する樂器の意）より起る樂音と殆んど其音色を等うする所あるに驚きしが、今や幸田女史のヴイオリンを聽くに及んで、恰もピヤノを彈ずるに於て發せらるゝ音の如く、弓もし弦を叩いて新音を起するには非ずやと疑はざるを得ざるを知れりと。

◉唱歌と柔術の活と　幸田女史の獨吟唱歌また是れ驚くべきものなり。其音聲の如何、音調の調不調の如きは抑ゝ末なり。女史口を開いて歌へば、音の出る所は口に非ず亦音聲帶にも非ずして辭々句々悉く肺肝よりするものゝ如く一聲口をついて出でんとする每に、躰自ら起り胸自ら張り音これ悉く力なるの感あり、其身搆へといひ、態度といひ、尙ほかの柔術士が失神者に活をいれんとして無限の生氣を之に集めて一聲エーのかけ聲を出さんとするに似たり。

◉演奏會是れ大說敎　我れこの演奏會に過つて幸田女史が、新道の『妙』に到達し、身を以て樂道に體するものあるを見、子孑たる牧師輩が千百の說敎を聽くに勝りて大に學ぶ所ありしを悅ぶ。人凡て『妙』の境に入れば、これ天地の靈に觸れたるもの言はずして人を敎へ人を導くべし。憐むべき哉、仁義道德を喃るの徒。小節小德に蹁躚するの輩。

◉音樂者と日本服と　幸田女史當日の服裝はエブニングドレスなりしが、その袖頗る短く臂に至らずして切られ、臂以下悉く肌を顯はし、腕の運動甚だ自由なるものゝ如く、觀るもの尙ほ且つその輕快自在なるを羨めり。然るに翻て日本服を見るにその袖頗る長くして且つ重く、婦人にありては其度特に甚し。此る重荷を腕にかけて之を巧に動かさんとす、それ難い哉。玆に於て以爲らく、日本の服裝はこれ音樂者に適せるものに非ず、よろしく大に新案をこらし改良工夫する所なかるべからずと。

◉策士的唱歌　策士の策をめぐらし思をこらして企圖する處、素よりたゞ一片の至誠によりて動かざるは武骨漢のなす所に異り、巧は巧なるに相違なしと雖ども却て是れ力の乏く人を迫たしむる事能はざる所以なり。かの音樂學校の唱歌なるもの、それこの策士の謀に似たるものには非る乎。之を形式の上より論ずれば其各種の樂音を混へ多くの複雜なる組織の間に調和をたもつが如き、必ずや樂耳ある人之を聽けば其苦心其習錬その巧實に驚くべきものあらん。然れども是れ巧に過ぎて却て人を動かす能はざるの源には非る乎。されば聽者のうち『春の夕』『矢島の浦』を聽いて心をうちしもの少く、却て『雪』の質朴なる歌調に袖をぬらせしもの多かりしならん。然りと雖ども、『八島の浦』に與一が目を閉て心に『歸命頂禮八幡大菩薩』と念ずる一節の如きに至つては吾れ人共に動かさるゝ所ありき。

◉幸田延子　幸田延子女史願くは、一大インスピレーシヨンを音樂學校の學風に加へこれに生氣の洗禮を施し世の滔々たる樂士輩をして詩美神の靈に觸れるを得せしめ音樂學校の音樂はこれ鳴る鋼や響く鐃の如しとの譏を受くることなからしめんことを。幸に樂耳なき俳漢の妄言を咎むるなくんば欣喜之に過ぎず。

巖本ぬしのうち君が
身まかり玉ふをいたみて　下田歌子

言の葉のいろなききはにのこしおきて
かれしかあはれ庭の若まつ

○

相逢稀却爲情深　今奈懷君無可尋
從是年々梅發日　敎吾惆悵淚濺襟

中島俊子

追懷嘉志子巖本女史時明治廿九年歳次丙申春二月



# 愛、撰び及び婚姻

左は川井小平二氏の結婚式場にて巖本が朗讀せしものなり。もと公けの說なれば別題を掲げて玆に收錄す。

人の心に寶藏あり、之を開くの鍵は愛なり。人の胸に活ける火あり、燃して其焰を揚ぐるものは交なり。夫れ人にして孰れか愛なからん、人に愛あるは、喩へば地に水あるが如し。地を穿つこと彌よ深くして水を得ること彌よ多し。愛の淺深厚薄とは、人心相開くとの淺深厚薄を言ふのみ。人もし温かに共に相接せば、胸中の活火奈何んぞ炎々ならざらんや。人燃えて互に熱し、相愛して其心を開かば、人間天稟の美煥發して花の如けん。此を以て、人の美は之を友として初めて認たむべし、人の善性は愛して後ち初めて見るべし。我に愛なくして而して人の美を求めんとするは、陽春の動くを禁じて、花の開かんとを望むが如し。左れば、人を貶して只だ之を誹るものは、必らずしも誹らるゝもの、惡しきにはあらず、誹るもの、惡しき也。天は夏を來さずして地を冷やかなりとは言はず、人豈に自から燃えずして而してたゞ人心の寒きとを歎く可けんや。惟みるに、上帝、吾等に此の秘義を敎へんとして

男女を造り、婚儀の制を定めて吾等が愛情を育て玉ふ、嗚呼天地皆な美なれども、先づ花を示して其美を明らかにし玉ふが如く、人皆な美なれども先づ相戀ふるものを與へて、互ひに其の美を認ためしめ玉ふ。玆に婚儀の御許を得て、同もに相契るの男女二者は、深く神聖の計らひを知つて、其の御旨を辨まへずんばある可らず。左れど、人の一生は海の波瀾の如し、人の相合ふは、雲の集散するが如し、花落て復開き、水涸れて更に流る。此を以て、泣くものと、笑ふものと、悲觀と樂天とあり、涙の落ると微笑の湛ふると、姿相似ずと雖ども則ち以て天に恨み則ち以て地に感謝するは、二ながら可ならず。吾等定めなき人事に圍まれ、無常迅速の變化にあひ、朝たにして夕べを知らず、夕にして亦朝たを知らずと雖ども、但だ善く大能の攝理に從ひて、其の生殺與奪に順服せば、人生の波瀾と、交の集散と、榮華の開落と、希望の盛衰と、夫れ何の相違かある。人如此くして初めて人事百般の變化に接することを得べし。余は本日此の祝典に列して以上の理りを覺ること尤も切なり。夫れ、熱愛の人川井君、熱愛の友小平子を得たり、敵多くして亦友多き吾友川井君は、誤まらるゝこと多くして亦知らるゝことの多き吾愛子小平女を得たり。余感激して涙禁ずる能はず。君等相伴ひ、之より相助けて人事の變遷に遭遇す。假令ひ人生のあぢきなき歎に接し、人のつれなき恨を聞くも、君等は此よりして復た一人にてはあらざる也。嗚呼、二君よ、希くは其愛を重ね、其交を重ね、知遇彌よ知り、合力益す合し、互ひに其美を鍾めて大に之を發揮せられよ。余や此の祝典に列して多くの言ふべきことあり、故に今ま之を言はず。但だ限りなきの同情と感謝とを寄せて、更に將來の祝福を上帝に祈禱す。某、謹んで白す。

……惟ふに今の學者皆能く其學に精通すと雖ども證する所ろ歴史の智識に乏しく音樂の趣味に貧しく而して最も宗教心に欠くる所あるは嘆ぜざるべからざることなり、……余は自ら慷慨禁ずる能はずといへども眞實を吐露すれば余は宗教心なきなり殘念ながら三百年來の遺傳を稟きたる余は宗教心なきを自白せざるべからず余にして若し宗教心あらば諸君が惡口の料ともなるまじきに今更後悔に堪へざるもまた如何ともなすべからず最後に余は諸君が努て今少しく宗教心を養成せられむことを切望するの意を表して斯演説を了らんとす云々、

（福地源一郎）

# 愛と智慧と

やなぎ

古きグリースの物語の、智慧の神なるアセナと、戀の神なるアフロダイテスとが、共にその父を同うせる姉妹なるぞ面白き。戀と智慧とは此くまでに離すべからざるものにや。コンコルドの聖人が、婦人の勢力の、青年書生が智力の發達に及ぼす所多きを記して、彼等の思想は之が爲めに明晰優麗となり、何事をなすに當つても、乾燥無味なる仕打ちなく、百事面白ろげなるものとなると言ひしは、げに理あることなり。こは唯に男子に於て眞理なるのみならで、そのこを慕ふうら若き處女も、時到りぬればアセナの祝福を受け智慧に滿たさるゝものにて、三人寄らずとも戀もし胎めば必ず文珠の智慧を生むものぞ。

わが例の如くに暑中の休暇にとて、遠き西の國よりしてなつかしき古郷に歸りしは昨夜のことなり。途に東京なるさる知人の許に立寄り伺ひ聞けば、我が初戀の君なる彼の人は、去年の夏一人娘の悲しさ、養子といふものゝ拂底を告げ居る時節のことなれば狂者ならざれば擇ぶところには非ずと、殊勝にも父母に迫まらるゝまゝに、さる餘り理想も高からぬ男を迎へて夫と仰ぎ、今やその種を宿して七八月になれりとのことなりしが、今宵はその母君なる人の我が伯母上にあたれるが、こなたより未だ訪れざるに、我れの見舞にゆけよ〳〵と娘なるかの君のせきたつるまゝに來られたりとておとづれられける。あゝ！あゝ！我れまだ一たびもこの戀に似たりてふ心のさまを打ちあけたることのなきに、彼の君早く之を推して我をあはれと思召し給ふにや。乙女は此ることには氣早きものなりとか、思へば昨夏我れ父の怒にふれて、俄に身を整へて家を去り西の國へと立戻らんとし、所々の家々に暇乞に行かばやと戸外に出でたる時不思議にも彼の君に出遇ひまつりて、共に暫く舊城趾に足を運ばせずやといはるゝまゝに、人目を忘れてその言の葉に從ひたることありしが、途に慰むるが如く怨るが如く『世は無情なれば百事意の如くならざるものたるを悟られよ』とすゝめ給りしは、さて千萬無量の意味あるとにてありし乎。そは兎も角に今宵は暗夜なり、早や九時も過たれば五十路に近き伯母君一人をこの田舍道に歸し參すとなか〳〵に心もとなし。われつきそひて送まへらせなば、

長く相見ざりし戀しき彼の君の今は人の妻となり又母たらんとする面影をも拜するを得てたより多からんと思ひたりしがそこに居並ぶ母上などの手前恐ろしく是を口にえ云はざりけり。伯母君のそろ〳〵と歸り仕度に取りかゝらるゝを見、母上は、提灯を持ち來られつるやと問へば、『否とよ我れそを携へ來らんとしけるが、娘之を妨たげて、もし携へ給はずば、必ずかの人母上を送り來給ふべければ、携へ給ふべからずとて、切にすゝむるより持ち參らざりけり』とは、これ伯母上の答なりき。あゝ！人の心のをかしさよ、不思議さよ。我れ之を思へば彼れ又之を思ふ。遂にわれは彼の君がはかりし如く、伯母君を送りまゐらせて其家に至り、かの戀しき君と微笑の交換をなしぬ。後二ヶ月ならざるに綠兒は其胎を出でゝおもしろき聲をあげ、我等の戀は遂に沈默のうちに葬られ終んぬ。嗚呼沈默〳〵これぞゆかしき戀の最後なるぞかし。然れどもまことなるは戀の胎みて智慧を生みたることなり。生理學者も申さく、人春氣發動期に達すれば身躰頓に發達し、之と共に心意活動の力を進歩すると頗る速かなる者なれば、此機に乗じて各種の修養を怠る可らずと、むべなりや。

## 春の曙　琴の音をきゝて

三輪田眞佐子

其一

枯れしと見えし草も木も、唐紅の花匂ひ、
霞たなびく曙に、心の駒にいざなはれ、
うき世の塵を旅衣、拂はむものと野邊に行く。

其二

あな美はしき四方の色と、心ほれ〳〵うちながむ。
ゆくりもなくに聞ゆるは、妙なる琴の遠音なり。
大和すがゝき面白く、唐のしらべもとり〳〵に。

其三

きゝのまに〳〵あこがれて、雲井のよそにひかれきぬ。
か黒き髪のはねかつら、白き錦を身にまとふ、
この世ながらの天つ姫、清き心を調ぶめり。

其四

玉手もゆらに引くさまは、千筋にしらべ一筋も、
三筋にひそめ七筋を、かきならす音は松風と、

ほのかにかよひ瑞垣の、久しきみよのてぶりかも。

其五

名殘を惜しみ見かへれば、霞をわけて旭日かげ、
花の梢にさしうつり、うす紫の雲なせり。
さすが蝴蝶もいとゆふの、いとろうたげに飛び迷ふ。

# 案山子迺舍諸社中詠草（第一）

池袋清風大人斧正評點

大阪第一社

豫題

春月

、さく花の雲、をわけつゝ朧夜の月影ふまん玉川のさと　今村幸子
（間　て　みよしのゝ山）

評玉川の内にも花はあるべしされど雲たなびくさいふべきほどに多くの花ありさは普通の感情にうかばざるべし

、隅田川かよふ小舟も絶えはててはなの梢の月ぞふけゆく　大島榮子
（うかへる　數へりて）

評此處花見小舟さいひたきも下に花ある故わりなくかよふさいはれしなるべしされどかくては他の用にて通行する舟のやう也かくうかべるさして花見舟の長閑なるさまも見ゆる也詠者は夜がふけし故絶はててさいはれたらんも京都の嵐山などならはさもありなん大都會の中にある花の名所小夜更ても急には然らざるべし

軍艦行かふ影もおぼろなりわだのみさきの春の夜の月　今村幸子
（吳のみなさ）

評何か目新らしき景色をいださんさて軍艦をも引出されしなるべしされど春月には殺風景也又行かふさは通行繁くて西よりも東よりも船が行き合ふさま也威海衛陥落もむかしにて遼東も取返され戰後收縮否泰平の今日には適當ならずまして和田の岬をや

、櫻さく賤がわらやもほの見えて野川の水に月ぞかすめる　大島榮子
（賤がやの軒端のはな）

評幽美の景色見えてよろしされど上句を實景に照らさば朧夜にはわらやよりもさくらの花の方白くて目につくべし故にかく添削す

、みよしのゝ峯をしのぶさくら花にほふ梢にいでし月かな　永井鶴子
（月ぞかすめる）

はるかなる流れきこえて朧夜の月おもしろき小松原かな　垣田廉

評流れきこえてはいかにとにや流れの音聞ゆるなるべし結句も今少しの心地すれば左にかく轉倒すべし

、小松原流るゝ水の音すみておぼろ月夜のおもしろきかな

されど澁谷國安の「春の夜の朧月夜に音すなり霞がくれの草川の水」の如き幽情眞に迫るには遙に及ばず

# 時　文

## 勞働會雜誌

東北學院長押川方義氏を會長とせる仙臺勞働會に於て雜誌を發刊す。此會の武育は多年吾人の見聞して敬服措かざる所ろなりき、今にして其文事の公けにせらるに會す、欣賀何んぞ堪へん。第一號所載「勞働會の精神」中に云く、

此會の武道敎育は如何と云ふに、即ち勞働なり、朝たに星を戴きて牛乳を運び、夕に月を踏んで新聞を配ろ、或は味噌醬油を鬻ぎ、或は牛肉を賣り、或は學校、教會の掃除をなす、凡て是れ武士が道場に武を研き、又は實際戰場に生死を爭ふが如し、彼等は信仰といふとを聽く、犧牲獻身といふとを聽く、知行合一といふとを聽く、忠實正直といふとを聽く、勉强忍耐といふとを聽く、廉潔公義といふとを聽く、而して彼等は勞働の際此を實行せんとを欲す、其怠慢として實業に不忠實なるが如きは、此れ武士が一城を托され、或は一の攻め口を委ねられて、臆病風を起し、敵に後を見せて敗走すると同一なりとなす、故に東北の都會仙台は、我が會員の大道場なり、又一種の戰場なりといふも不可なし。

吾人は眞實に此の雜誌の愛讀せられんとを、今の靑年諸君に勸告す。文武不二、言行一致、智德同躰は即はち今の敎育界の爲めに切に闡明すべきの義、此會と此雜誌と正に能く其の用を爲すもの也。

## 實用養鷄全書

杉田文三、藤井米八郎の二氏同著、池田商店より出版す。從來養鷄書類多く出でたりと雖ども、實際家の助となるべきもの、恐らくは之を以て第一とせん。蓋し著者盲を下す苟くもせず、多くは其の實踐經歷に發すれば也。加之、年中行事、月別の案内の如きは、ここに實地の利便となると多し。

## 西洋立身編

素と是れスマイルス氏立志篇に對して作したるものゝ飜譯なるべし、譯述作辭尋常にあらず、引證事例尤とも佳なり、松村介石君の引に曰く、余の如きは嘗て此書に得たる所ろ多しと、實に立身者の好指南たり。警醒社の出版に係る。

親鸞眞傳○冷熱○犯罪救治論○成業立身錄○の四書は次號に於て評すべし。

# 時　報

## ○岡山孤兒院、明治女學校へ義捐す

岡山孤兒院の石井十次君は、左の書を明治女學校長に寄せ、院內有志の義捐金を集めて、同校新築費のうちに寄附せられたるよし。皆是れ院內諸君の自活勞働より得られたるを割かれしにて、其の五厘、二厘の金に至る迄で汗血の餘に非ざるはなし。中にも二十四名の有志食を斷ちて三十七錢の金を寄せられたりと云ふと、人をして感奮痛哭に禁へざらしむ。左れば、同校にても之を特殊神聖の寄附とし、別途の用に充らるべき計畫のよし也。

拜啓仕候扨去る土曜日晚、女子部第一組の例會に於て、女學雜誌第四百二十號を拜讀いたし、某女の發言にて御校のため應分の義捐を集め聊か御校に同情を寄せんとの事定まり、翌日曜日に全院に發表し別紙の如く微少の金員相集り申候間、兒等が汗の一滴と思召、御受納被下度奉願候。幸にして院內一同至極壯健に相働き相學び居申候間御安心被下度奉願候

四月八日

○明治女學校建築費義捐金

| | | | |
|---|---|---|---|
| 貳錢 | 正富住吾 | 拾錢 | はな |
| 拾錢 | 小澤ふく | 拾錢 | みれ |
| 貳拾錢 | ……… | 拾錢 | つる |
| 四拾八錢五厘 | ……… | 拾錢 | たきへ |
| 拾錢 | ……… | 拾錢 | カタリン |
| 五錢 | 早田貞次 | 五錢 | 高橋 |
| 拾錢 | 守田幸太郎 | 五錢 | 長野 |
| 拾錢 | 宇都宮 | 四錢 | 村松 |
| 拾錢 | 奈良夫 | 貳錢 | 岩崎 |

拾錢　宗
五錢　川村
五錢　林
五錢　奥村
拾錢　りよう
拾錢　高原
五拾錢　ルカ
壹錢　須澤
拾錢　長野米吉
五錢　清水亨治
拾錢　芳島依秀
參錢　小野田老人
貳錢五厘　坂本眞亮
四厘　齋田平三
壹錢　石井政治
貳錢　山田治三郎
貳錢　廣瀬久嶋
貳錢　磯貝
壹錢　岩松
貳厘　赤澤
拾五錢　小野田鏡猟
五拾錢　山木光太郎
貳拾錢　大工部一同
〆八圓拾貳錢六厘

五錢　森友治
拾錢　宮崎
貳錢　森宮晴
參錢　渡邊はつ
五錢　高橋
貳拾錢　鷲見金三郎
五錢　井口珍男
五錢　無名
拾錢　木村さみ
五錢　瀧本さく
拾錢　森みつ
拾錢　渡邊はつ
拾錢　小松ちよ
拾錢　平井ゑん
拾錢　山中ふじ
拾錢　堤かねよ
貳圓六錢五厘　岡山孤兒院献金部
拾錢　林崎將太郎
五錢　柴田次
五厘　笹川こと
貳拾錢　田中正吉
貳錢　長野米吉
參拾七錢　此金は廿四名の兒童が夕飯を断食して出せしものに御座候

## ○臺灣の亞片

李鴻章曰く、本大臣敬服の至に堪へずと。渠をして眞とに斯く久しく敬服せしめ、更に全世界の幾人をして讃歎せしめんには、速かに台灣の亞片を禁ずるにあり。况んや、三百万の生靈此の厭ふべき毒烟の爲めに半死の狀に陷いらんとし、遂には四千万人の中にも影響し來らんとするをや。日本をして支那國の如くならしめざるには、今にして早く之を禁壓するにあり。もし夫れ異日經濟問題などと密着して利害上容易すく制御し得ざるに至らば則ちまた之を奈何んかする。今や府下の有志此に觀るあり、大いに運動する所あらんと云ふ、是れ稍や意を安ずべきの事とす。

## ○大須賀孤女學院長の渡米

府下王子瀧の川村にある孤女學院の始末は、本誌の讀者が斷えず掛念せらるゝ所あるなるべし。院內の事業漸次に發達し、近頃に至りて彌よ好都合の由なるが、茲に大須賀亮一君固く思ひ立つ事のありて、去る十八日飄然渡米の途に上られき。此は、孤女等のうちに取分け白痴者の多きより感激し、近時亞米利加に於て大いに進歩せる白痴教育の狀態方法なんどを調査せんとの熱心に出しなり。教育に經驗あつき大須賀君にして、其の着實周密なる研究をもて、新たに白痴の事を調査せられんには、其得らるべき所ろ其家づとにして還らるべき所ろ、挙に齎いて之を待つべし。吾等は、日本の女學及び白痴教育の爲めに、同君の此行を慶し、其の淸健にして恙なく歸朝あらん日を仰望するもの也。因に云ふ、同君不在中は、伴藤井の二君代つて院內事務を理めらる可しとぞ。

## ○ツルー女史永逝す

府下角筈村養生園の主任ミセス、ツルー、去ぬる十八日夜、同園に於て永逝す。女史は我國に渡來せる婦人宣教師中の先鞭にして其最初の來着は今を距る二十二年前にあり。櫻井女學校の規模を擴張して今の女子學院たらしめたるもの、及び一種の新趣構になれる養生園を創立したるものは、皆な女史の力なり。女史風采閑雅靜淑にして處女の如く、而も衷に非凡の精力を包む。其の周匝なる經驗、其の撓みなき熱心、其の率直なる眞實、其の事業に對する熱愛執着は、女史を知れるものゝ皆な敬重措かざる所ろなりき。今忽まちにして此人を失へるは、啻に女子學院及び養生園のみの不幸にはあらず、眞とに婦人事業全般の爲の不運なり。女史を失へるは即ち日本女子教育界惣躰の悲痛也。

## ○米國婦人協會聯合總會

米國婦人協會聯合總會は今より六年前の創立にかゝり、其目的とする所米國にある各種の婦人協會が、氣脈相通じ社會運動のために盡瘁するにあり、此大會を催せること既に二回、一は廿五年を以てシカゴ府に開かれ一は廿七年を以てフ井ラデルフ井ヤに開設せられ、尙は每二年之を催すの規約なるを以て本年はルイスヴイーユに開かるゝとの事なり。現今この聯合總會に加入し居る婦人協會の數は無慮四百五十四にして、本年の大會にては各協會おの〳〵文學慈善社會經濟家庭財政教育等の諸方面に於てなせる事業の報告をなし、且つ今後運動法等に就き熟議する所ありと。

## 訂正増補 三版 大日本人名辭書

（附表）皇統、親王家、藤原氏、平氏、源氏、北條氏、新田氏、足利氏、織田氏、豊臣氏、德川氏、皇學家、儒者、醫師、武術諸流、刀劍師、金工、佛工、宗門、繪畫諸流、猿樂、相撲、淨瑠璃、長唄、俳優、俳諧、茶流系圖、及び大日本偉人年表

此書は上は帝王相將より下は士庶名媛工藝諸雜家に至るまで、苟も有名なる者は皆之を網羅し、此傳記貳萬有餘に及べり、蓋し我國古來の人物を知らんと欲せば此書に就て求むるより善きはなし、是に於て乎近時日本歷史、小學修身書等、此書に據りて著作したりと思はるゝもの少しとせず、然るに前版は既に賣盡したるを以て世間往々非常の高價を以て賣買するに至れり、是れ豈文苑の一大欠典ならずや、特に日清戰爭以來猛將勇士我國威を輝かせし者極めて多し、是亦以て後世に傳へざる可らざるなり、故に弊社は前版を訂正し且新に千七百餘名の傳記を增補して第三版に着手し、曩きに豫約を募りしに一千餘名の多きに達したり、今般**製本出來**に付**當四月中**を限り**特別廉價金拾圓五拾錢**を以て**高需に應ずべし**但し遞送料は別に申受く

**大本全一册**
紙數三千百餘頁
洋裝背及び角革
色クロース表紙美本
**定價拾貳圓**

## 新版 英國碩學ダルウィン氏著 文學士立花銑三郎君譯

## 生物始源 一名 種源論

ダルウィン肖像入
四六形一千餘頁
色クロース表紙美本
定價壹圓五拾錢

現世紀に於て進化論を道破し、造化の幽妙を開き、空前の玄理を明にし、啻に生物學科に於けるのみならず、學術界思想界の全般に一大革新を促し、以て第十九世紀の文物をして光彩陸離たらしめたるもの、孰れか英國碩學ダルウィン氏の種源論の右に出るものあらんや、我社嘗て此の邦譯なきを遺憾とし立花文學士に請ふて之を譯し、遂に今回の出版を見るに至る、庶幾くは亦我邦の學術を資益し、我邦の文籍を完備する一端たるを得ん歟

明治廿九年四月

東京市京橋區彌左衛門町七番地
電話千二百二十三番

合名會社 **經濟雜誌社**

布川靜淵　小此木信一郎　二氏合著

# 俳諧史傳

和製美本　紙數三百二十頁　中本全一冊
定價廿七錢　郵送税四錢宛　許郵券代用

俳諧の道近頃大に興り、去年此書を公刊せし吾社の微志をして幸に酬いあらしむ、幸慶何ぞ及ばん。それ、俳諧は我文學史上に一大特殊の光明を煥發す、一句十七言、尺幅の裡、無限の烟波渺々として際なし、俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞德となりて諧謔を擅にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる談林の花を咲かしめ、更に詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、閑寂沈痛なる正風俳諧の面目を構成す。數百年の間相傳へ、相襲ぎて庶民の美妙なる想念を漾蕩せしめ、其妙なる詩、天地に消遙す。其源流に溯り、其發達を叙し、其推移を討ね、其變遷を記し、其特想を論じ、其繙讀一番、炳焉として斯文學を腦底に活現せしむるを期したるは、我が「俳諧史傳」なり。之を分てば、俳人個々の傳記となり、之を聯ぬれば、整々一卷の史篇となす、逸事あり、名句あり。一誦の下、恍々乎として、月明かに花香しき境に遊ぶが如からしめむ。若し夫れ一筆輕々に下さず、一字苟もせず、而も文章平易簡明、叙記精確、剴切なるや否やは、世自ら公論あらむ。世の文士、一本を座右に備へざる可らず。

早稲田文學評に曰く、此書近年の好著、比較的に言へば、空前の好俳諧史傳なるべし、史眼の頗る濶大なる、叙事評論の其主題と相叶ふて優美、又閑雅、奇警、又遒勁なる、讀むものをして卷を措く能はざらしむるの致あり。

出版發賣元　東京下六番町六番地　女學雜誌社

---

# 新刊圖書

山縣悌三郎著 新 **成業立身録** 定價金參拾錢 郵税貳錢

**商工業及貿易案内** 定價金參拾錢 郵税四錢

渡邊修二郎著 **自轉車術（圖解）** 定價金參拾錢 郵税貳錢

**新體詩集** 詞藻第一 定價金拾五錢 郵税貳錢

**詩集** 詞藻第二 定價金拾五錢 郵税貳錢

**歌集** 詞藻第三 定價金拾五錢 郵税貳錢

**文集** 詞藻第四 定價金拾五錢 郵税貳錢

明治二十九年 **東京遊學案内**（改正増補第十版） 定價金參拾錢 郵税四錢

**習文録** 第壹卷 第貳卷 定價毎卷金貳拾錢 郵税貳錢宛

中學程度 **作文大成** 定價金四拾錢 郵税六錢（並製）定價金參拾錢 郵税四錢

**詩學捷徑** 定價金廿五錢 郵税四錢（並製）定價金貳拾錢 郵税貳錢

**就職受驗案内** 定價金拾五錢 郵税貳錢

# 定期刊行雜誌

**文庫** 毎月一回發行（四月廿五日第貳卷第五號發刊）定價金拾錢六冊前金五拾五錢十二冊前金壹圓郵税壹錢宛
洋装合本第一卷（自一至六）定價（郵税共）金壹圓

**青年文** 毎月一回發行（五月十日第參卷第四號發刊）定價金八錢 六冊前金四拾錢十二冊前金七拾五錢郵税五厘宛
洋装合本第壹卷（自一至六）第貳卷（自一至六）定價（郵税共）金五拾錢宛

（注意）爲替拂渡局 駒込郵便局
郵券代用 郵便爲替局の無き地に限る 但し貳割増の事

發行所 東京府下北豐島郡上駒込村拾九番地 **少年園** 電話四百參拾八番

岡田起作先生編輯

# ◎女子習字帖　全八冊

○第一楷書府縣國名　既刻　定價金一錢
○第二楷行體日用文字　近刻
○第三行書日用文字　近刻
○第四行草體日用文字　近刻
○第五草假名烏丸帖　既刻　定價金十八錢
○第六假名烏丸帖の續　近刻
○練習科の上假名雅文　近刻
○練習科の下假名雅文　近刻

右は女子高等師範學校教務囑托岡田起作先生が多年の經驗に由り高等女學校及び尋常師範學校女子部等の教科に充つる爲め書せられたる習字帖にして其の書體は先づ極めて正格なる楷書より始めて假名に至る迄の間に著しく等使ひの變化を感ぜざるやうに知らず識ずの中に轉換せしめて終に假名の妙處迄は知覺せしむるをさとせられ候故に高等女學校第一年生には楷書を同しく柔らかにし第二年生には殆んど楷行體に第三年生には行書第四年生には行草體第五年生には草書假名第六年生には假名補習科第一第二年生には稍高尚なる假名にして他日各自の嗜好する古人の(貫之道風行成　尊圓親王)等の法帖に移り易きやう勗めて僻のなきやうに書せられ候ものに有之候此度弊店乞て發賣仕候間何卒公私の女學校に於て御採用之程希望の至りに堪へず候敬白

金昌堂主人　敬白

右大賣捌所

女學雜誌社

## 女子習字教授新法の大意

書は以て己れの心性を露はすものなりとは古人も已に之を言ひき故に男女互に其性を異にすれば則ち其性情に適し德操に應すべき字體を學ばざるべからざるは言を俟たざるなり然るに今や女子にして往々男子風を摸して放縱疎暴なる字を書し其品性に適合せざるをも顧みざるもの尠しとせず是れ余の甚だ遺憾とする所なり抑も婦人にして其性情に適する書に妙なるに至らば一見して其人の品格の高尚なるを相見すべく苟も之れに反すればたまく以て其人を輕蔑するの念を惹き起さしむるに至らん此に由て之を觀れば其書の良否は以て其人の德性を表出するに足るべし世の令閨淑女の假名字を修めんと志ある方の爲めに教授をなし彼の最も婦人に適應せる文字を習練せしめ一は以て婦德を今日に涵養するの助となし一は以て美術を將來に進歩するの階梯となさんとす

岡田起作

丹後の岡田生起作余に從ひて學ぶこと年あり人となり質樸謹厚にして操守堅固なり假名字文字を善くす嘗て女子習字法を發明し之を試むるに意の如くならざるなし來りて余に質す余乃ち私家女子をして就て學ばしむ頗る其[illegible]生善く之を世に布んとす因て余が實驗する所を擧げて四方君子に告ぐ生の性質技藝の如きは觀る人亦自ら之を知らむ

明治廿四年彌生

重野安繹志るす

余常謂、爲女子取師。不可不選其人。其人苟不正、縱令學得其學藝。亦或至敗其德操矣。岡田生起作久遊余門。去歷任師範校中學教員。其學藝固不俟稱道。其爲人篤實而溫和。方正而謹愼。蓋兼學德者。非此則不足以爲女子師矣。因書一言於其授業法後。告世爲女子選師者。

明治辛卯春

中洲　三島毅

---

## 巖本嘉志子英文集

右英文集巖本嘉志子の肖像(アートタイプ)明治女學校々舍及學生の圖(銅版)、傳紀等を添へて出版せり、有志者の購讀をまつ

一冊正價六十錢、郵稅四錢

發賣所　東京　女學雜誌社

---

女學雜誌定價表

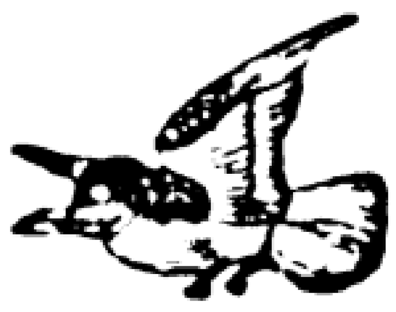
| | |
|---|---|
| 前金 | 價 |
| 一冊 | 金拾錢 |
| 壹年前金 | 金壹圓 |

(無郵稅)

明治廿七年一月十四日　內務省許可
明治廿九年四月廿四日　印刷
明治廿九年四月廿五日　發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場(電話十九番)

明治廿五年三月十五日遞信省認可



明治廿五年三月十五日遞信省認可

明治二十九年

# 女學雜誌

五月
刊行